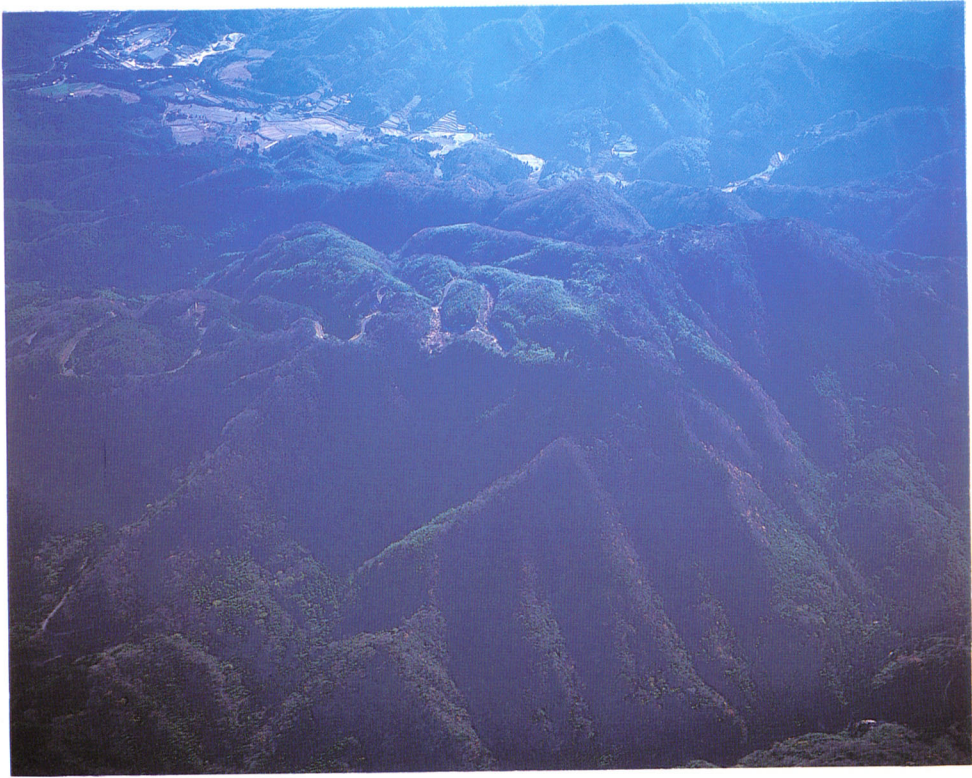


石見銀山遺跡発掘調査概要 9

1998.3

島根県大田市教育委員会



上空北より見た仙の山（頂上が石銀地区）



灰吹法に使用した鉄鍋

序

平成5年度から始まりました石見銀山遺跡石銀地区の発掘調査も5年目を迎えることになりました。銀山の山頂に位置する石銀地区は、鉾山町の遺跡であり、そこでは銀鉾石の採掘や銀製錬が盛んに行われていたことが、これまでの調査で明らかになってきました。

近年、石見銀山の歴史とその遺跡は、石見銀が戦国時代の日本と諸外国との貿易において大きな影響を与えたことや、400年の歴史をもつ鉾山遺跡がよく保存されていることで注目されています。一方、この貴重な遺跡を保存保護し後世に伝えていくことが私達の責務であると考えられています。

今年度の調査では、戦国時代に銀を抽出する灰吹法に使用した鉄鍋が出土したことをはじめ、鉾山町の様子のわかる遺構や遺物が多数発見されました。

平成8年度からは島根県教育委員会との共同調査となり、また石見銀山遺跡の全体像の解明に向けて、総合調査もスタートいたしました。調査において御指導・御協力頂きました関係各位に深く御礼申し上げるとともに、本書が石見銀山遺跡に対する御理解と、今後の調査研究の基礎資料として活用されるよう祈念いたします。

平成10年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 大久保 昭 夫

例 言

1. 本書は平成8・9年度の国庫補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、史跡石見銀山遺跡発掘調査の調査概報である。
2. 調査体制は下記のとおりである。なお、石見銀山遺跡発掘調査委員会からは調査の全般にわたり指導を受けている。

【石見銀山遺跡発掘調査委員会】

田中 琢(奈良国立文化財研究所長)	田中圭一(元群馬県立女子大学教授)
田中義昭(島根大学法文学部教授)	脇田晴子(滋賀県立大学教授)
小寺八郎(同和鉱業(株)取締役管理副本部長)	熊谷國彦(島根県大田市長)
宮原史郎(島根県温泉津町長：平成8年度)	安田増憲(島根県温泉津町長：平成9年度)
池亀 貴(島根県仁摩町長)	山崎悠雄(島根県教育委員会教育次長：平成8年度)
広沢卓嗣(島根県教育委員会教育次長：平成9年度)	

【事務局】島根県大田市教育委員会 文化振興室(教育長 大久保昭夫)

【調査員】島根県教育委員会 大庭俊次(平成8年度)・椿 真治(平成8年度)
広江耕史(平成9年度)・目次謙一(平成9年度)
大田市教育委員会 遠藤浩巳

【調査指導】

松村恵司(奈良国立文化財研究所考古第二調査室長)・村上 隆(奈良国立文化財研究所主任研究官)・坂井秀弥(文化庁記念物課調査官)・小池伸彦(文化庁記念物課調査官)・永原慶二(一橋大学名誉教授)・村上 勇(広島県立美術館主任学芸員)・神崎 勝(妙見山麓遺跡調査会)・大瀧光信(大館分析技術センター)・萩原昭一(同和工営株式会社)・島根県教育委員会文化財課

3. 出土遺物及び作成した写真・図面は大田市教育委員会で保管している。
4. 調査で使用した座標は、公共座標系第Ⅲ系である。挿図中の方位については、座標北を示す。
5. 本書の執筆・編集は上記の調査員が共同でおこない、関係各位の協力を得た。

目 次

I 調査の概要・経過	1
II 石見銀山遺跡の概要	4
III 調査の概要	9
IV 小 結	43
V 写 真 図 版	

挿 図 ・ 目 次

第1図 石銀地区位置図	2
第2図 石銀地区調査区位置図(1/5,000)	3
第3図 石銀第I・II調査区設定図(1/500)	10
第4図 第I調査区遺構配置図(1/150)	12
第5図 第I調査区建物跡平面図(1/40)	13
第6図 第I調査区1・2号炉跡実測図(1/10)	14
第7図 第I調査区3号炉跡実測図(1/10)	15
第8図 第I調査区1号石積み土坑、3号土坑実測図(1/30)	16
第9図 第II調査区遺構配置図(1/200)	17
第10図 第II調査区溝跡土層断面図(1/40)	18
第11図 第I・II調査区出土遺物実測図(1/3)	20
第12図 第I調査区遺構配置図(1/60)	21
第13図 第I調査区トレンチ土層断面図(1/60)	22
第14図 第I調査区1～4号炉跡平面図(1/20)	22
第15図 第I調査区2～4号炉跡実測図(1/10)	24
第16図 第II調査区遺構配置図(1/125)	25～26
第17図 第II調査区鉄鍋出土状態(1/5)	28
第18図 第II調査区坑口前トレンチ実測図(1/20)	29～30
第19図 第II調査区道跡平面図(1/80)・溝跡土層断面図(1/40)	32
第20図 第II調査区道跡土層断面図(1/40)	33
第21図 第II調査区1号建物跡平面図(1/80)	34
第22図 第II調査区2号建物跡平面図(1/80)	35
第23図 第II調査区1・2号炉跡平面図(1/10)	36
第24図 第I調査区出土遺物実測図(1/3)	38
第25図 第I調査区出土遺物実測図2(1/3)	39
第26図 第I・II調査区出土遺物実測図(1/3)	40
第27図 第VII調査区遺構配置図(1/80)	41
第28図 第VII調査区1・2号集石遺構平面図(1/20)	41
第29図 第VII調査区出土遺物実測図(1/3)	42

I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に史跡指定を受けて以来、代官所や坑道跡である間歩を中心に整備と活用が進められている。また、埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、昭和58年以降継続して保存と整備のための調査が実施され、採鉱と製錬の遺跡など、これまで未解明であった遺跡の実態が少しずつ明らかにされている。

平成3年度は、銀山下河原で吹屋（精錬所）跡が検出された。吹屋の規模は間口6間、奥行10間以上の大規模な礎石建物跡で、内部に要石や石組の作業台、井戸、溝などの施設をもち、土間面のいたる所が被熱し、一面からからみやゆりかすが出土している。遺跡の年代については17世紀前半と考えられる。炉の遺構が検出されていないため、吹屋の性格については今後の課題である。

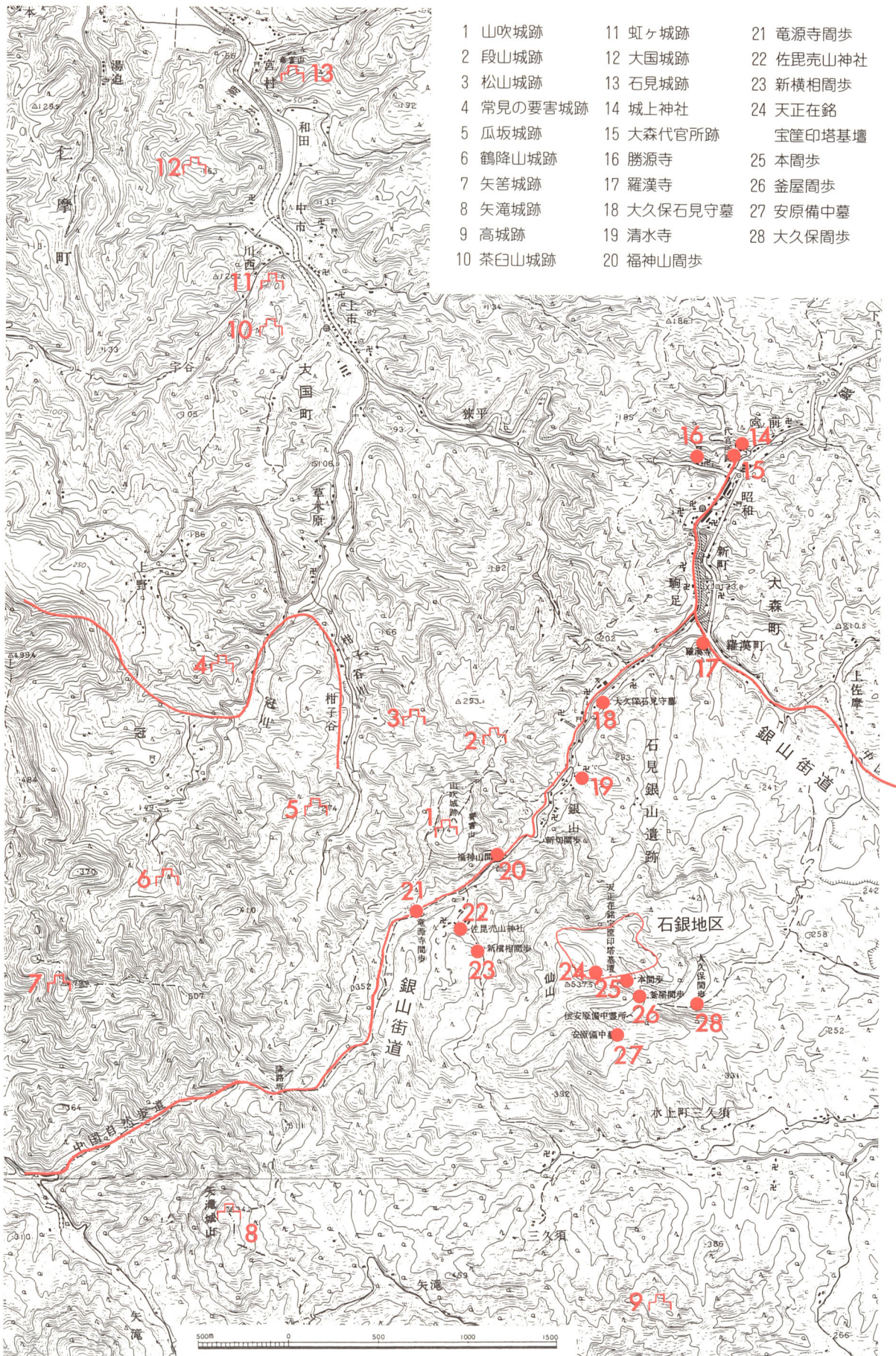
平成4年度は、国指定史跡山吹城の大手にあたる下屋敷地区でトレンチ調査をおこない、戦国期の城館遺跡の一部や江戸時代初頭と考えられる吹屋の遺構が検出された。吹屋は礎石建物跡でトレンチ内で炉跡が2基検出され、周辺からは大量のからみと、鑿や分銅などの遺物が出土している。炉跡については構造等から精錬工程のどの段階であるか特定はできないが、出土したからみの様態から永久鉱床の鉱石が精錬されたものと推測される。

平成5年度は、仙ノ山山頂の東に広がる石銀地区の千畳敷南向山で調査をおこない、17世紀前半と考えられる選鉱と精錬をおこなった吹屋跡が検出された。この吹屋の構造については、既に露出していた石垣の位置に対応して南北と東西方向に礎石列が検出されたことから礎石建物跡と考えられ、内部に土坑、石積土坑、炉跡などの施設が存在している。平成5年度の調査地は、石銀地区の西側に位置する幅40mの谷合に位置し、調査面積は160㎡である。この谷合のほぼ中央に、道跡が東西方向に存在することが確認されており、道跡の両側には平坦地が存在している。

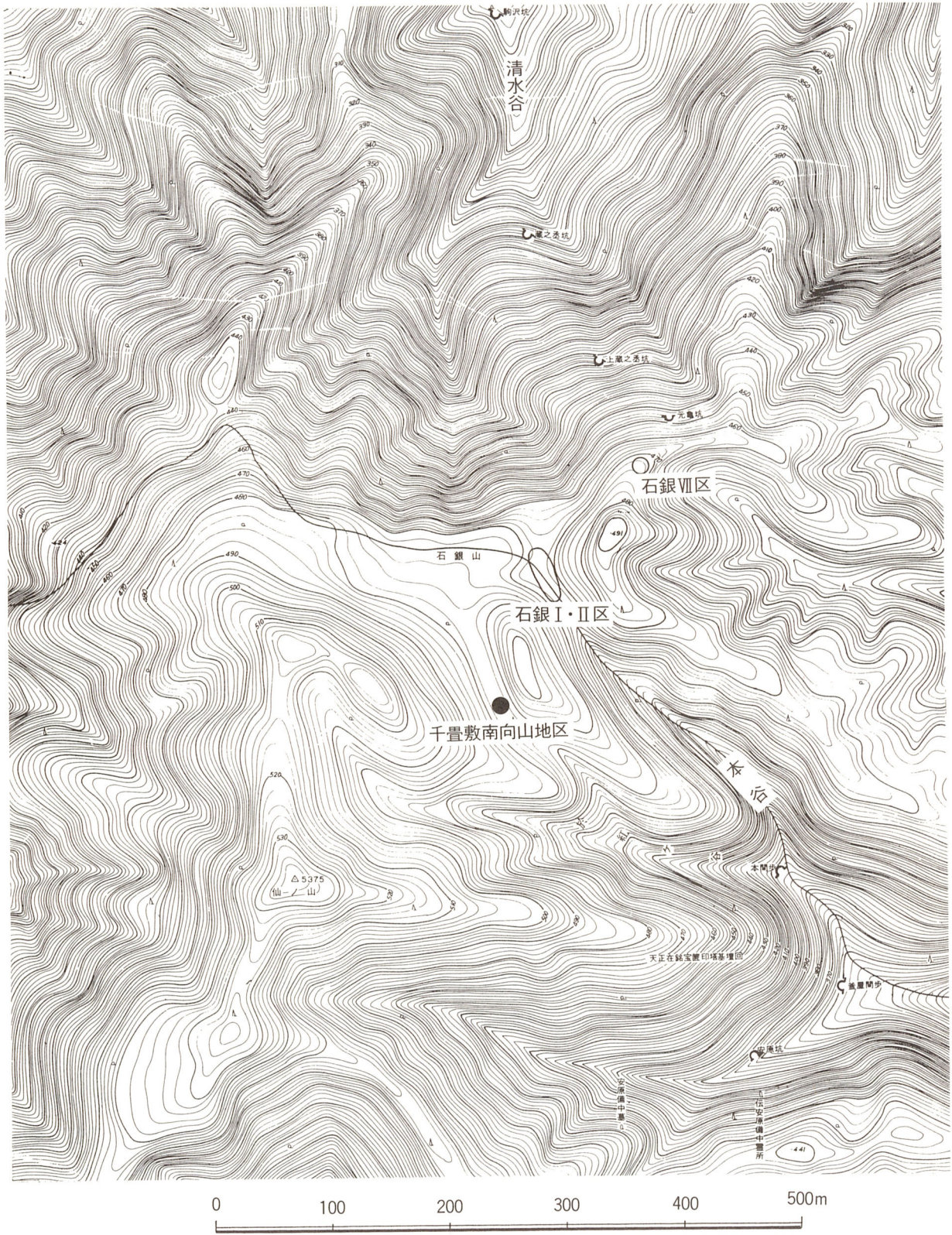
平成6・7年度は、5年度からの継続調査として、石銀地区の千畳敷南向山で調査をおこなった。調査対象としたのは、道跡とその南に隣接する平坦地290㎡である。調査の結果、北平坦地と同様に吹屋跡と考えられる建物跡が検出された。調査結果として注目されるのは、精錬炉の遺構が良好な状態で検出されたことである。その他の内部施設については土坑・石積土坑などの施設がある。精錬炉とその周辺部分50㎡については調査区を拡張して全体像を把握する必要があり、平成7年度の継続調査とした。

平成8年度からは、大田市と島根県の共同調査としておこなっている。石銀Ⅰ・Ⅱ地区は本谷と清水谷からの道が交差する部分にあたり、当時の町の中心となる場所と考えられることから調査区を設定した。調査の結果、南北方向の道と礎石建物跡を検出し、建物内において精錬の炉跡を確認している。Ⅱ区の北側において播鉢状の落ち込みを検出している。用途は不明であるが、大きな溝が掘られている。平成9年度も石銀Ⅰ・Ⅱ地区とⅦ区、出土谷地区のトレンチ調査をおこなった。Ⅰ区は、炉跡が3基並んだ状態で検出した。Ⅱ区は、道跡に面して建物が2棟並んで建てられており、江戸時代前半の時期と考えられる。この建物跡の下層において戦国時代の建物跡と精錬に使用した鉄鍋が出土している。

石銀地区は分布調査の結果、広範囲に遺跡が存在することが確認され、石銀地区を含め石見銀山遺跡の全体像を握むことが急務であると指摘されてきたところである。平成5年度からは発掘調査



第1図 石銀地区位置図



第2図 石銀地区調査区位置図 (1/5,000)

等の基礎資料となる500分の1の遺跡測量図の作成を開始し、遺跡の調査と保存保護に備えることにした。

Ⅱ 石見銀山遺跡の概要

1. 石見銀山史について

(1) 戦国期の再開発と争奪戦

石見銀山は鎌倉時代の末期の延慶2年(1309)、大内氏により発見されたと伝えられている。その後の本格的な再開発は、大永6年(1526)に博多の豪商神屋寿貞と出雲鷲銅山(島根県大社町)を経営した山師の三島清右衛門が入山、「三人の穿通子吉田与三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門を引連れ銀峯山の谷々にて石を穿ち、地に掘て大に銀を採り、寿亭皆収め採り九州に帰りけり」(『銀山旧記』)と記されている。その後寿貞は天文2年(1533)に博多から慶寿と宗丹という二人の精錬技術者を連れてきて、当時朝鮮半島でおこなわれていた「灰吹法」という精錬技術を現地に導入、その後産銀量は著しく増え、16世紀の中ごろから17世紀にかけて石見銀山は最盛期を迎えることになる。

石見銀は銀山が佐摩村にあったことから「ソーマ(Soma)銀」と呼ばれ、海外にも多量に輸出され、中国や朝鮮半島などのアジア諸国とポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国を交易で結ぶ役割の一端を担ったといわれている。16世紀の産銀量や日本から海外に持ち出された量については不明であるが、17世紀前半の産銀量は年間約1万貫(約38トン)と推定され、世界の産銀量の3分の1を占めていたといわれる日本銀のかなりの部分を産出していたと考えられている。海外の文献にも日本銀が大量に海外に運ばれたことが記されており、「福建の唐人が銀を買うために日本へ行き、風に吹き流されて朝鮮にいたった」(『朝鮮中宗実録』)や、「インドのカンパヤの薬品やマラバル・南洋諸島の香料を積んでシナに向かう船は(中略)のちに日本銀を積むのが主要目的となったため、ナウ・ダス・プラタス(銀船)と呼ばれるにいたった」(『フレデリチ航海記』)とある。

戦国時代の銀山の争奪戦については、大永の再開発以来、永禄5年(1562)に毛利氏が銀山を掌握するまで、周防大内氏、川本小笠原氏、尼子氏等の激しい争奪戦が繰り広げられた。石見銀山攻防戦の拠点となったのが要害山に築かれた山吹城である。この争奪戦は『銀山旧記』『陰徳太平記』などによると、大内氏が銀山を支配下に置くのが大永年間(1521~28)で、その後享禄4年(1531)に川本の小笠原長隆が銀山を手に入れるが、天文2年(1533)には大内氏が奪回する。同6年出雲の尼子経久が銀山を攻め一時期銀山を掌握するが、同8年再び大内義隆が奪回、翌9年には尼子詮久が銀山を攻略、さらに翌10年には小笠原氏が銀山を攻め支配下に置いている。このように銀山の争奪戦は大内氏・小笠原氏・尼子氏の間で繰り広げられるが、その後は大内氏の後覇権を得た毛利氏と尼子氏の激しい攻防戦が始まる。弘治2年(1556)吉川元春は山吹城を攻め手中に収めるが、永禄元年には尼子氏が河合郷の堂ノ原で銀山通路を遮断、山吹城を孤立させることで銀山を奪取した。同2年毛利氏は銀山の回復に力を注ぎ、同7月には吉川元春・小早川隆景らと兵一万四千で仙山に布陣し山吹城を攻めたが失敗した。しかし、同5年城将本庄常光を懐柔して軍門に降らせ、銀山と山吹城を完全掌握することとなった。毛利氏の銀山の直接の管理は休谷の山吹城の大手に位置する休役所が拠点となった。休役所の管理は福光郷・大家西郷に本拠を置く石見吉川氏がおこなっていた。

戦国時代の銀山の具体的な支配・経営の実態については不明な点が多いが、天正9年(1581)7月5日の「石見銀山納所高注文」(『毛利家文書』)には、石見銀山で得た銀のうちから各方面に上納・支出する部分が項目ごとに記されており、朝廷に収める公用分、聖護院門跡へ上納する聖門領、銀山奉行と推定される下河原に居住していた生田・服部両氏の取分である下河原生田・服部分、合わせて年間銭33,072貫、銀にして115貫752匁であった。これは43匁を一枚の板にすると2,692枚となる。これに山役960枚を加え、計3,652枚を収めることになるが、さらにこのほか年中節句御礼銭・いし金・むろ役・「荒屋敷床ヨリ納む代」などの費用にも充てられていた。この頃の年間産銀量は数百貫以上もあったと推定されており、同納所高注文にみえる額の数倍が毛利氏の収益となっていたと考えられる。またこの資料からはいし金(石銀)が盛んに稼行しており、毛利氏の銀山開発の拠点として重要な位置を占めていたと推定される。豊臣秀吉は本能寺の変後、毛利輝元との間で講和条約締結の交渉を進めていた。石見銀山の管理は天正年中に秀吉が派遣した近実若狭守と毛利方の三井善兵衛が共同で奉行することになったという(『銀山旧記』)。これは天正12年のことと推定され、同19年には毛利輝元が秀吉の命を受け、銀山と分国内の運上を支配するため林就長と柳沢元政の両名を奉行に任命している(『毛利家文書』)。以後慶長年間に至るまで石見銀山奉行とよばれ、銀山の管理に重要な役割を果たしたといわれる。

(2) 大久保長安の経営と江戸期の石見銀山

慶長5年(1600)徳川家康は大久保長安と彦坂元正を石見に派遣、石見銀山摂収に乗り出した。慶長5年の「銀山諸役銀請納書」(『毛利家文書』)によれば、納銀定高が2万3千枚であるが、14,077枚27匁5分が未進となっていることを、毛利氏の代官であった今井越中ら四名が大久保長安らに報告している。その後長安が初代奉行として石見銀山の経営と石見地方の支配にあたるが、その特徴は外部の地方巧者や毛利氏時代からの有能な地役人を登用したことである。慶長10年の「大久保長安諸役者申付状」(『吉岡家文書』)では「地方のくゝり」を竹村源兵衛・河井小右衛門が、「諸役のくゝり」を岩崎玄斎・岩佐才右衛門が直接あたることを定めている。また城普請についても定められているが、毛利氏の奉行所であった休役所が長安の時代にも引き続き奉行所となり、慶長9年から大規模な普請が行われた(『高橋家文書』)。

大久保長安の銀山経営の特徴は、長安と山師が決められた割合で鉱石を分ける荷分制という新しい経営技術と、長安が身に付けていた甲州流の鉱山技術といわれる。後者はこれまで湧水のために稼行が困難であった坑道を、排水坑道を掘ることにより再生させたこと、また地下深く掘る場合の酸欠対策として、空気抜きの竪坑を掘るようにしたことがあげられる。その他には吹屋(製錬所)を直接経営している。長安の時代は支配領域が銀山中心であったのに対し、二代目の奉行竹村丹後守の時代には銀山の周辺地域を含めた石見国の実質的な支配がおこなわれるようになったといわれている。

石見銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎え、当時の産銀量は年間8千貫から1万貫はあったと推定されている。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3千6百貫の銀を産したという。また銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間(1688~1704)の頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の迺摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御囲村3ヶ村が設定され

坑内の支柱（栗材）や灰吹き銀精錬用材や坑内作業に必要な縄・吹などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道については慶長初期頃から奉行所（代官所）直営の御直山と、山師の請負山である自分稼山があった。御直山の経営は公費から資金・資材が供給され、出鍾（鉱石）を一定の割合で公儀・山主銀掘りに依分け（荷分け）されるもので、その割合は時代により変遷があった。寛永期以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになり、延宝年間（1673～1680）にはいると産銀量は年間約4百貫に減り、幕末の安政6年（1859）には30貫と記録にある。

江戸期を通じて奉行・代官・預かりが59人も入れ替わり、石見銀山附御料4万8千石の統治と銀山の管理をおこなっている。

(3) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は大政官布告により地元の田中義太郎に払い下げられ経営が続けられたが、明治5年（1872）年の浜田沖地震で間歩のほとんどは水没し、全山休山状態となった。同20年大阪の藤田組に権利が移譲され、仙山南の本谷鉱区で採掘が再開された。このときから大森鉱山が正式名称となり、仁摩町大国の柑子谷永久稼所が開発の中心となった。同35年には発電所を建設し電動式ポンプによる揚水で再び活況を呈した。主要産品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り隆盛をみた明治後期から大正初期には、永久谷は一大鉱山町に発展した。大正6年（1917）の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、そのうえ安価な外国産銅におされ、ついに大正12年6月に休山に追い込まれた。昭和16年（1941）国の援助で同和鉱業株式会社が再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、永久谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、再開発は断念されることとなった。

〔主な参考文献〕

- 1 『石見銀山に関する研究』山根俊久、石東文化研究会、1962年（臨川書店復刻、1978年）
- 2 『日本鉱山史の研究』小葉田淳、岩波書店、1968年
- 3 『江戸幕府石見銀山史料』村上直・田中圭一・江面龍雄、雄山閣、1978年
- 4 『同和鉱業100年史』同和鉱業株式会社、1985年
- 5 『島根県の地名』平凡社、1995年

2. 石見銀山遺跡について

遺跡はその内容から城館遺跡・銀生産遺跡・銀山支配関連遺跡・信仰遺跡・その他の遺跡に大別される。間歩・墓地・城跡など14ヶ所が国指定史跡になっている。遺跡の発掘調査は大田市教育委員会が昭和59年度から実施しており、平成8年度からは島根県と共同で調査をおこなっている。

(1) 城館遺跡

銀山争奪戦の拠点となった山吹城のほか、周辺に山吹城攻防の際に毛利氏が布陣した仙山頂

上の仙山城郭群、大内氏の築城といわれる矢滝城がある。山吹城は国指定史跡である。

要害山に築かれた山吹城跡は頂上部に階段状に郭を配し、主郭の南には大規模な空堀、南斜面には計19本の堅堀、北側の郭には一部石垣がみられる。山麓の大手の下屋敷地区には休役所跡と焰硝蔵跡には大規模な石垣が存在している。下屋敷地区ではトレンチによる発掘調査がおこなわれており、休役所に関連する遺構が検出されている。

(2) 銀生産遺跡

露頭掘り跡・坑道跡、吹屋（製錬所）跡がある。坑道は仙山の頂上部に近い位置に賦存する福石鉱床と、要害山の地下に賦存する永久鉱床が開発されたもので、坑道の分布状況は鉱床が賦存する範囲とほぼ一致する。戦国期の採鉱については露頭掘りと考えられ、仙山の山頂付近の石銀では露頭掘りの痕跡と推測される溝状の遺構が発掘調査で検出されている。坑道のうち大久保間歩・釜屋間歩・本間歩・龍源寺間歩・新横相間歩・福神山間歩・新切間歩は国指定史跡である。

吹屋跡としては分布調査などにより栃畑谷吹屋跡、山神奥吹屋跡などがあり、発掘調査されたものに下河原吹屋跡、山吹城下屋敷地区で検出された吹屋跡がある。下河原吹屋跡は間口6間、奥行き10間以上の敷地をもつ礎石建物跡で、内部に精錬施設をもっている。

(3) 銀山支配関連遺跡

南北に細長い大森の町並みの北側に国指定史跡の代官所跡が位置している。文化12年（1815）に普請された表門と長屋が現存する。代官所敷地内の発掘調査からは建物の基礎となる石列検出されており、蔵の遺構と考えられている。代官所跡の東には中間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡があり、行政機関や役所が集中している。江戸時代の銀山町はその周囲に柵列を巡らし、10ヶ所の口番所が出入口となっていた。蔵泉寺口番所跡の発掘調査は、柵列の基底部と考えられる石列が検出されている。また間歩の入り口には四ツ留役所が置かれていたが、龍源寺間歩前の発掘調査では石列や礎石の一部が検出されている。

(4) 信仰遺跡

寺院・神社跡と墓地などがある。墓地には多数の墓石が確認されており、宝篋印塔・五輪塔・無縫塔などがある。墓石の形態から戦国時代末から江戸時代前半を示すものが多く、特徴的なものに宝篋印塔・五輪塔に高さ1mに満たない一石彫りのものがある。これらの石材は邇摩郡温泉津で盛んに生産された福光石のものが大半である。寺院・神社跡については分布調査などにより33ヶ所が確認されている。天正在銘宝篋印塔基壇・安原備中墓・伝安原備中霊所・大久保長安墓所・佐毘売山神社は国指定史跡である。

(5) その他の遺跡

町年寄遺宅・郷宿遺宅・地役人遺宅・同心遺宅などの建物跡が残されている。地役人河島家敷地内の発掘調査では、江戸時代初期と考えられる石列や井戸跡が検出され、現在の町並みの下層には町の大半を消失した寛政12年（1800）の大火以前の町並みの遺構が遺存している可能

性がある。近代の鉱山遺跡としては銀山の清水谷に藤田組により建設された清水谷精錬所跡の遺構が大規模なものである。関連するトロッコ道の跡や事務所跡・変電所跡などが残されている。

〔主な参考文献〕

- 1 『石見銀山発掘調査概要』 1～8、大田市教育委員会、1984～1997年
- 2 『石見銀山遺跡分布調査報告書』 島根県教育委員会、1986年

Ⅲ 調査の概要

1 遺跡の位置と環境

石見銀山遺跡は島根県大田市大森町に位置する仙の山（通称銀山）全山、約300haの範囲に広がる遺跡である。石銀は仙の山山頂の北から東の、標高470～490m前後に広範囲に存在する平坦地の地名で、その広がりはおよそ20haである。平成8・9年度に調査を行った石銀Ⅰ・Ⅱ・Ⅶ区は、「石銀藤田」と呼ばれ、周辺には「石銀池ノ段」「石銀薬師ノ段」「金生山」などの地名がのこり、現況はそのほとんどが竹林に覆われている。

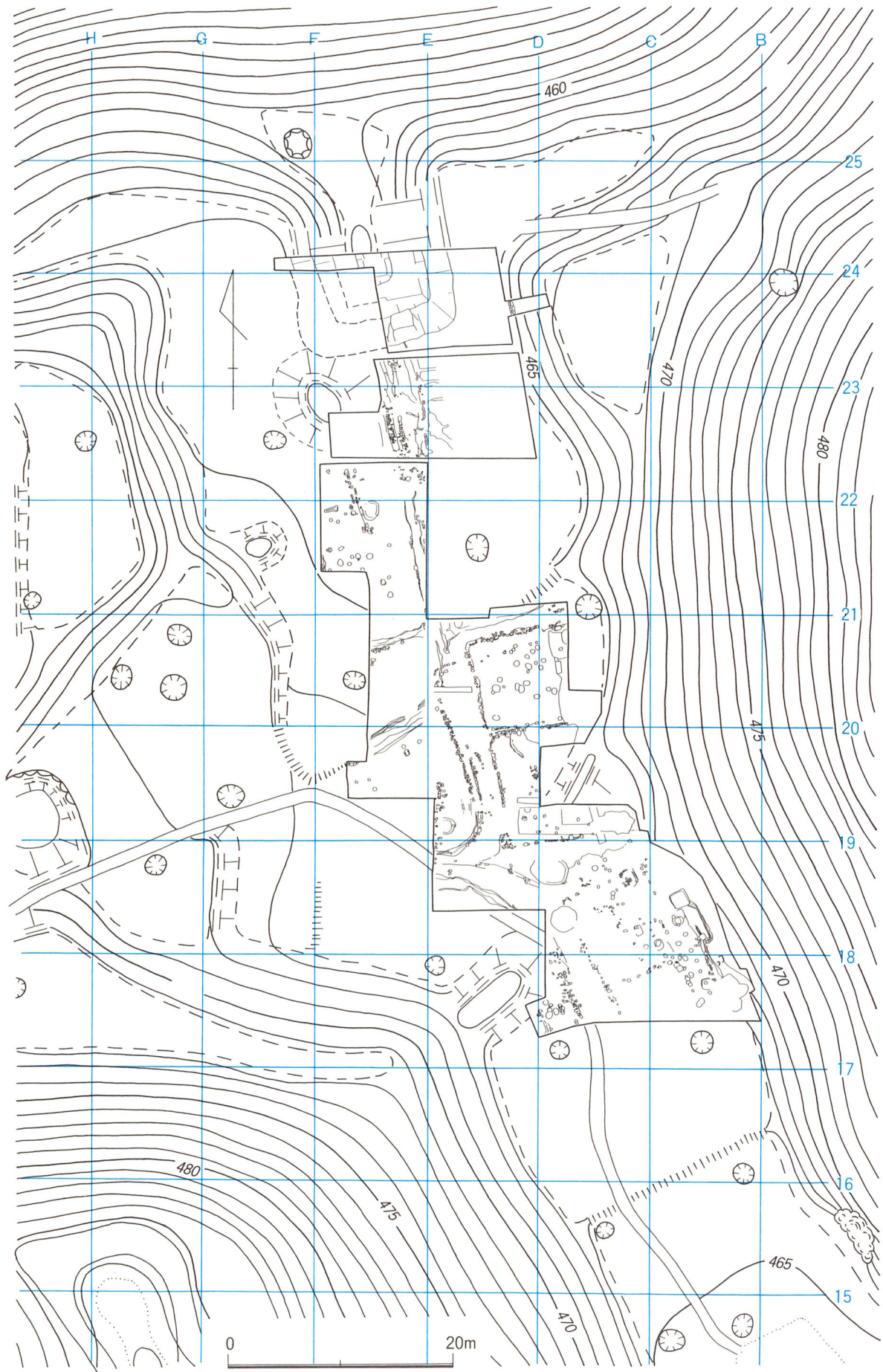
石見銀山の鉱床には、仙の山東部の鉱染型鉱床である福石鉱床と、仙の山西部の鉱脈型鉱床である永久鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物は、輝銀鉱・自然銀・方鉛鉱・酸化鉄で、黄銅鉱・黄鉄鉱はきわめて稀であるのに対し、永久鉱床は黄銅鉱・黄鉄鉱・方鉛鉱・閃亜鉛鉱・自然銀・赤鉄鉱である。両者の違いは鉱床の型のちがい、銀と銅の含有量のちがいである。石銀地区は福石鉱床の最上部付近にいたり、戦国時代の石見銀山の再開発は石銀付近の露頭掘りから始まると考えられる。福石鉱床の地表部は自然銀が豊富と考えられている。これは雨水の酸化作用等により硫化銀から自然銀に変化したと考えられ、このことは産銀量の推移や製錬技術を考える上で、重要な要件となっている。

石銀地区はこれまでの分布調査の結果、採鉱の遺跡である露頭掘りや坑道の跡、造成されたテラス（平坦地）、墓地・道・池・溝などが確認されている。平成9年度からは石見銀山遺跡の総合調査が始まり、石造物調査・間歩調査が実施されている。石造物調査では、墓石を中心に分布と内容の調査がおこなわれ、石銀地区では墓地と考えられる場所が3ヶ所と、尾根上などに墓石が点在する様子が明らかされ、その年代は最古が慶長5年(1600)で、それ以降の江戸期のものが見つかっている。間歩調査は石銀地区を中心に48haの範囲で調査が行われ、その結果間歩が302、露頭掘り跡が32ヶ所確認されている。またこの調査の中で、ズリやカラミが分布する範囲が確認され、採鉱や製錬の作業の場所を復原する資料となっている。

文献史料の石銀の初見は、天正9年(1581)の「石見銀山納所高注文」（『毛利家文書』）で、毛利氏支配下での銀山の公納額が記載されており、その中に「代八十貫いし金口役」とみえる。これは石銀の入口で、石銀に運び込まれる物資に課せられた通行税と考えられている。またこの時の鉱山の稼ぎ場に対して課せられた採掘税は「山役年中分九百六十枚」とみえる。慶長5年(1600)11月の「石見銀山諸役未進付立之事」（『吉岡家文書』）には、「石金ノ酒役」350枚とあり、実態は不明であるが、石銀の酒屋に課せられた税が、同史料の「温泉津酒役」18枚に比べると20倍あることから、石銀の鉱山町の賑わいが想像される。近年明らかにされた「高野山浄心院過去帳」（『上野家文書』）には石銀に39名の檀家名が記されている。これらの人々は石銀本谷、石銀曾根、石銀のひら、石銀小池ノ段などに居住し、そのほとんどが天正から寛永期のものである。

【参考文献】

- 1 『島根県の地名』平凡社、1995年
- 2 田中圭一「中世金属鉱山の研究」『歴史人類』第22号、筑波大学歴史人類学系、1994年



第3図 石銀第I・II調査区設定図 (1/500)

2 平成8年度調査の概要

(1) I 区

I区では礎石建物跡・掘立柱建物跡、道跡、露頭掘り跡・坑道跡、炉跡、土坑などの遺構を検出している。炉跡の存在、出土したカラミや羽口などの遺物から、建物については吹屋（製錬所）と考えられる。道跡は幅2m前後で、表面に礫やズリが敷きつめてある様子が確認された。道跡の西には幅0.3～1.5mの溝を伴っている。調査区東の丘陵斜面は、表土を除去すると岩盤が検出され、建物跡と関連すると推定される溝跡やピットが岩盤に穿たれていることが確認され、建物が斜面裾まで拡がっていたと考えられる。またこの岩盤には幾筋かの鉱脈が確認され、鉱脈の部分が採鉱された痕跡がある。

建物跡

礎石建物跡と掘立柱建物跡がある。礎石建物跡は調査区の南で検出し、道跡に面している。二棟の建物跡は南の調査区外に拡がると考えられる。検出した建物跡の南東の部分が全体に攪乱を受けており、建物内部施設については不明である。礎石間距離は1m前後を測り、この礎石列と並行に掘立柱建物跡と考えられる柱穴が並び、柱穴間距離は礎石列と同様に1m前後を測る。この二つの建物の新旧の関係については、掘立柱建物跡が旧くなると考えられる。攪乱土中や柱穴から羽口や、鍛冶滓と観察されるスラグや鉄製品が出土したことから、鍛冶を行った建物の可能性があり、今後の検討課題である。

この建物跡の北側では、整地された作業面上において、選鉱・精錬遺構を集中して検出している。この遺構が集中する範囲については、当然建物があったと推定され、礎石と考えられる上面が平坦な石やピットが検出されているが、攪乱等により規模・構造が復原できる検出状況ではなかった。

採鉱遺構

調査区東の丘陵斜面で検出した鉱脈を採鉱した痕跡は、鉱脈の部分だけが穿たれ、その跡が溝状になっているものである。露頭掘りの跡と考えられ、溝の両側には鉄分・マンガン分が脈状となっている。

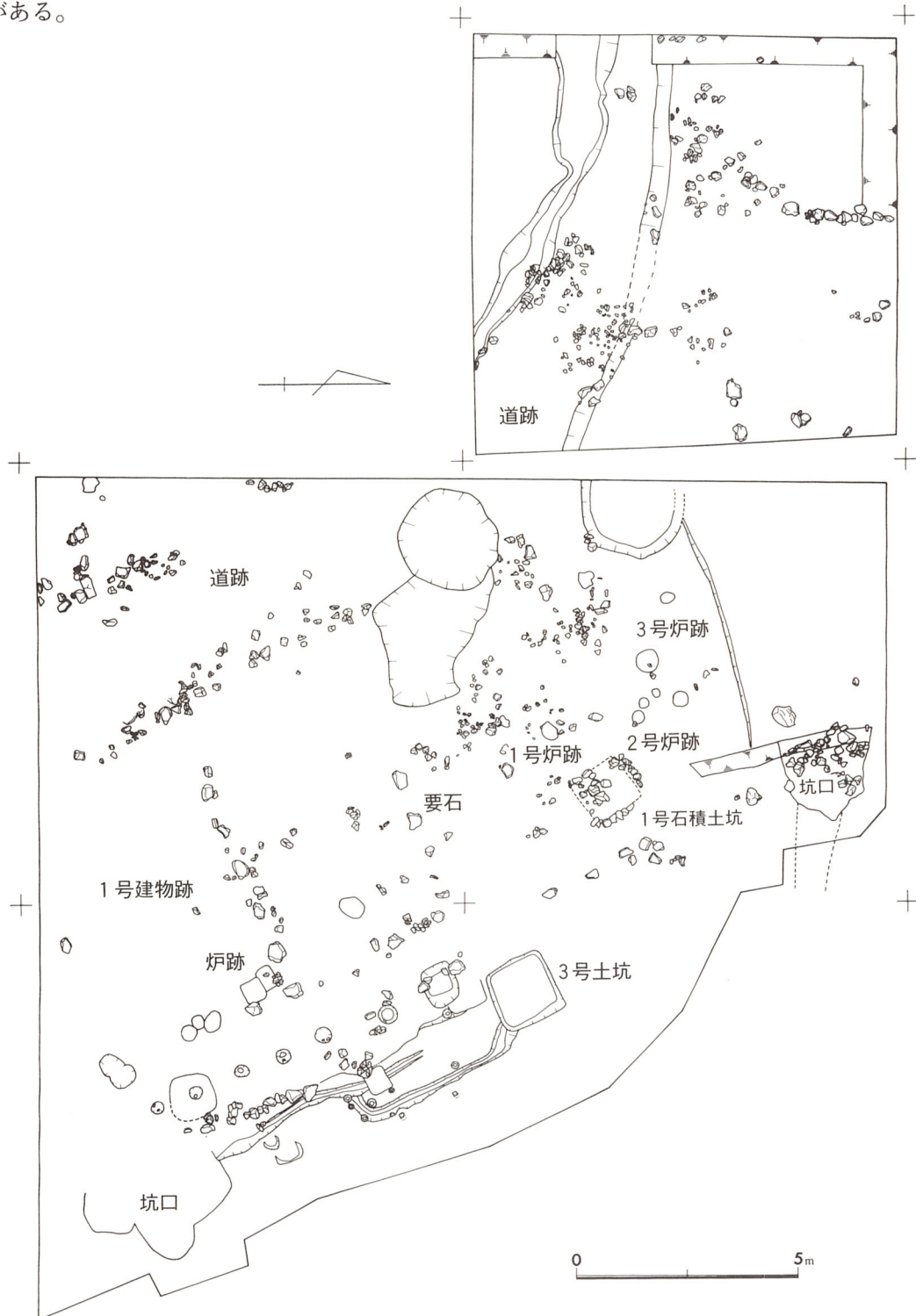
D-19グリッドで検出した坑道は、調査前から坑口が開いていたものである。坑口前にはズリが小山状に堆積しており、ズリ除去後に作業面が検出された。この作業面は坑口に向かってスロープ状に下がって坑口に至る。坑内は下方に傾斜し、坑口から近い部分で上方へも掘られている。坑内の状況から、坑道の掘り方は坑道掘りではなく、鉱脈を追いかけて掘り進んだ錮押し掘りと考えられる。

精錬遺構

建物跡の周辺で検出した炉跡と、建物跡の北側の炉跡群がある。これらの炉跡はそのほとんどが炉上部が削平された状況で検出され、また何度かの造り替えにより切り合っているため、遺存状況は良好ではない。検出した炉跡は、土間を窪め粘土貼りを行ない、炉を築く地床と考えられ、炉底部の粘土貼りが残存している。粘土貼りの状況を観察すると、平面形が円形のものや方形の二つのタイプがあることがわかる。また粘土については、作業面に使用された粘土ではなく、比較的混入物のないものを使用し、黄色や赤橙色を呈している。

炉跡の中で遺存状況が良好と判断された、1～3号炉について掘り下げと断ちわりを行った。

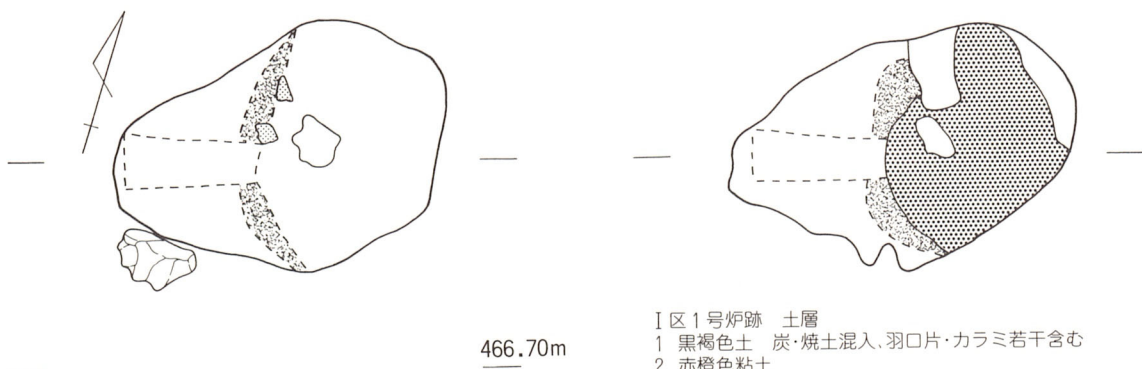
1号炉は、直径30cmの円形の範囲が1層の黒褐色土で、この中に炭・焼土・羽口片・カラミを含んでいる。炉跡の西側に粘土貼りが確認され、8層の赤茶色土は被熱し、硬化していることが観察された。断ちわりによる断面の土層をみると、2・3層の粘土は作業後に入り込んだ可能性がある。この炉跡について注目される点は、粘土貼りの中に7層の灰白色土がバチ形に埋設されていることである。この灰白色土は粒子が細かく均質であることから、灰になる可能性がある。



第4図 第I調査区遺構配置図(1/150)

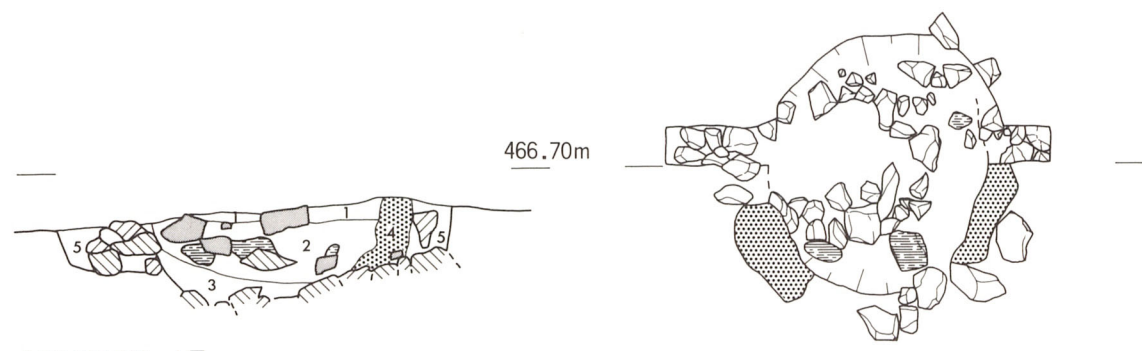
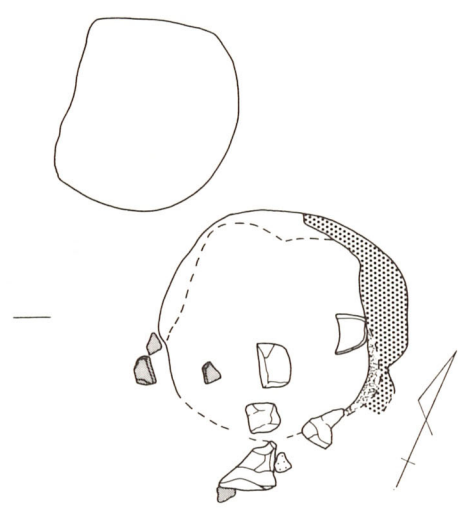
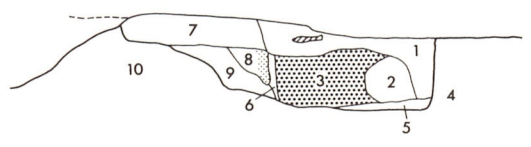


第5图 第I调查区建物迹平面图 (1/40)



- I 区 1 号炉跡 土層
- 1 黒褐色土 炭・焼土混入、羽口片・カラミ若干含む
 - 2 赤橙色粘土
 - 3 暗黄褐色粘土
 - 4 灰褐色粘質土 整地層
 - 5 黒色土 炭混じり
 - 6 黒色土 炭混じり
 - 7 灰白色土 灰か？
 - 8 赤茶色土 炉壁・粘土
 - 9 暗褐色粘質土
 - 10 褐色土 黄色粘土ブロック少し混入、炭混入

	炉壁片		羽口片
	被熱部分		カラミ
	黄色粘土		粘土ブロック

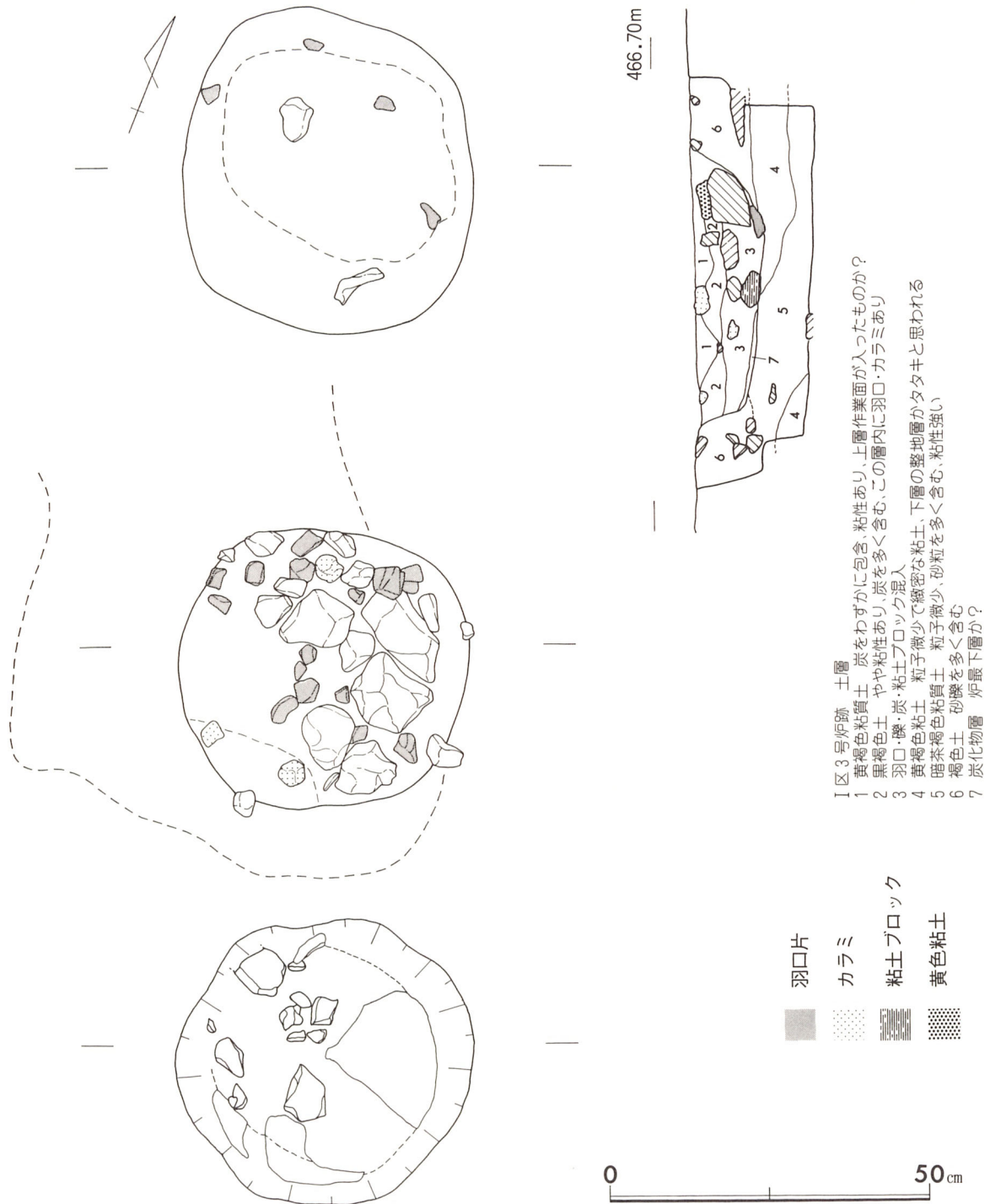


- I 区 2 号炉跡 土層
- 1 暗黄褐色粘質土 礫・羽口・ネコ包含、上層の整地層
 - 2 黒色砂質土 羽口・礫・カラミの層、炭若干包含
 - 3 茶褐色粘質土 砂粒を含む、礫を多量に含む、下層の整地層、部分的に黄褐色粘土ブロックがのる
 - 4 黄褐色粘土
 - 5 褐色土 粒子微少でやや粘性あり



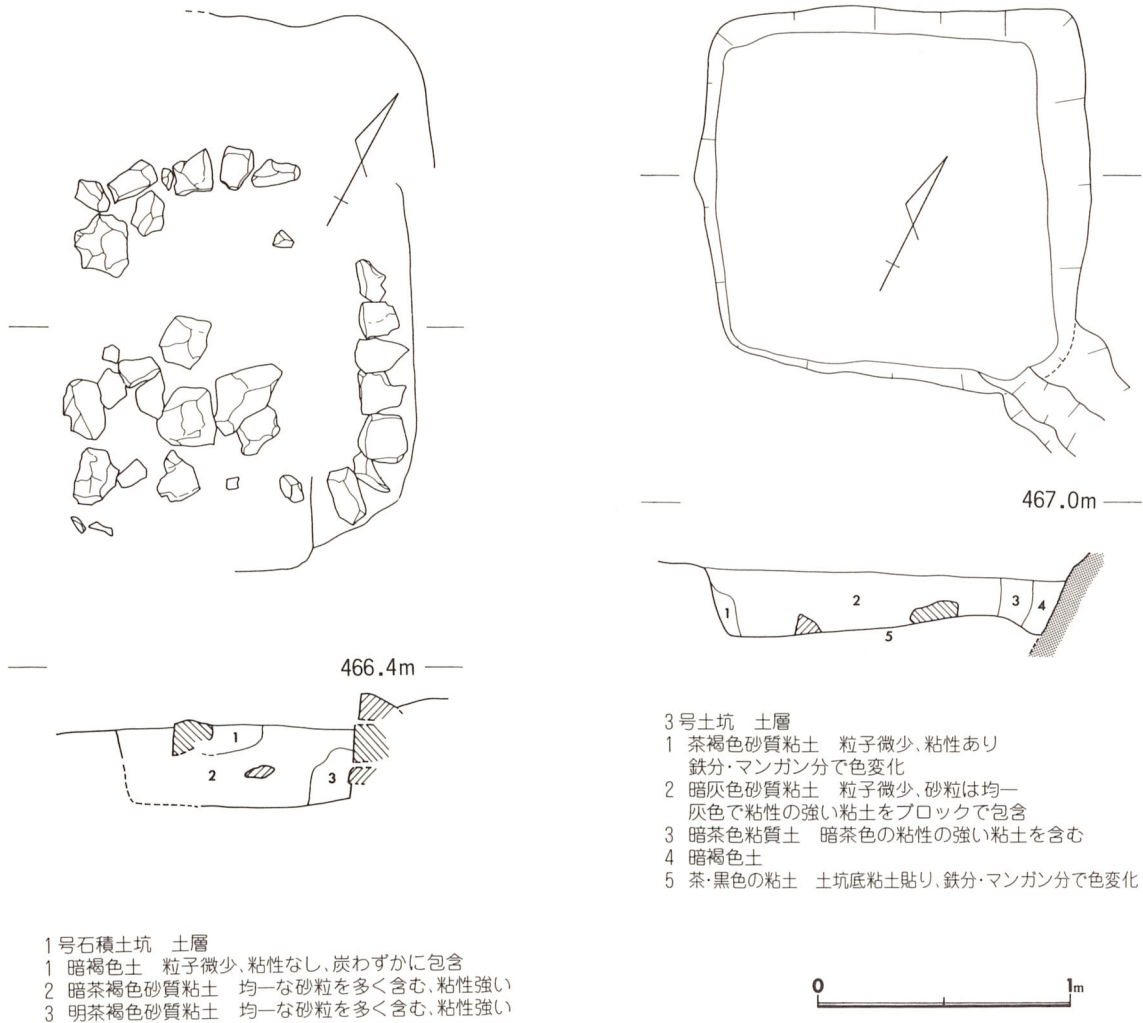
第 6 図 第 I 調査区 1・2 号炉跡実測図 (1/10)

2号炉は直径30cm前後で、周囲を廻る粘土貼りがよく残っていた。炉内1層の暗黄褐色粘質土から、羽口片や火除けの粘土板（江戸時代の文献にみえる「ネコ」）の破片が出土し、2層の黒色砂質土も羽口片やカラミを包含している。3層の茶褐色粘質土の上面に黄褐色粘土ブロックが部分的のっていることから、3層の上面が最初に築かれた炉底となると考えられる。3層の下は礫が隙間をもちながら敷かれており、蓄熱と防湿を目的とした炉の下部構造であろう。最終作業時の炉底については2層上面か、削平を受けた可能性がある。



第7図 第I調査区3号炉実測図(1/10)

3号炉は直径45cm前後で、粘土貼りは確認できない。2層黒褐色土が炭を多く含み、羽口片・カラミを包含している。3層は羽口片・礫・炭・粘土ブロックの層となっている。断ちわりによる断面の土層をみると、炉は3層および7層の下を炉底として築かれたと観察される。その後数度の操業後、最終操業時は3層の上面が炉底となり、3層は炉の下部構造となった可能性がある。なお2層に含まれる羽口片は断面が方形になる羽口で、3層の羽口片の中には断面が円形になる羽口片が含まれている。また2号炉と3号炉で出土した断面方形の羽口が接合し、ほぼ一個の羽口になることが判明している。

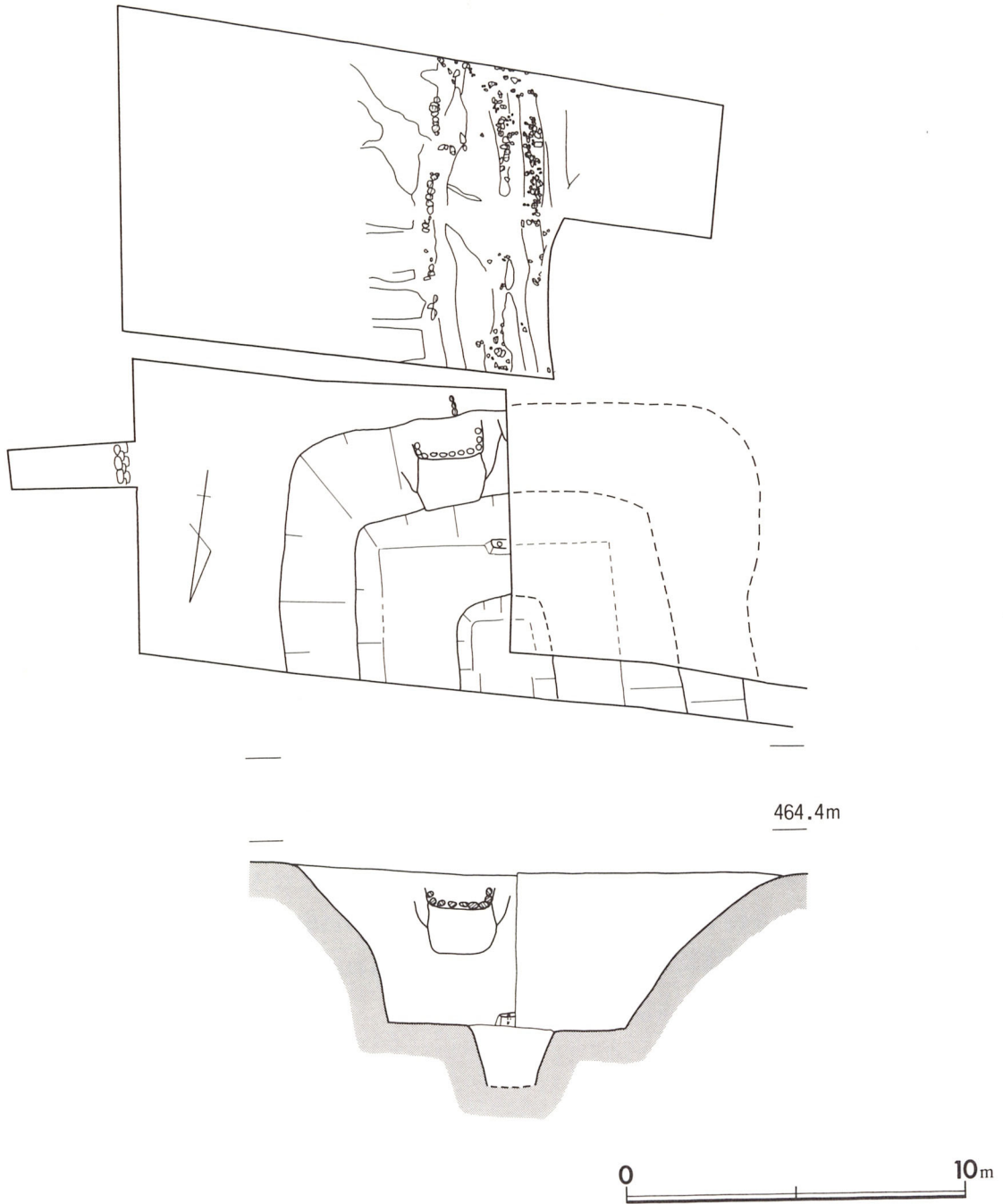


第8図 第I調査区1号石積み土坑、3号土坑実測図(1/30)

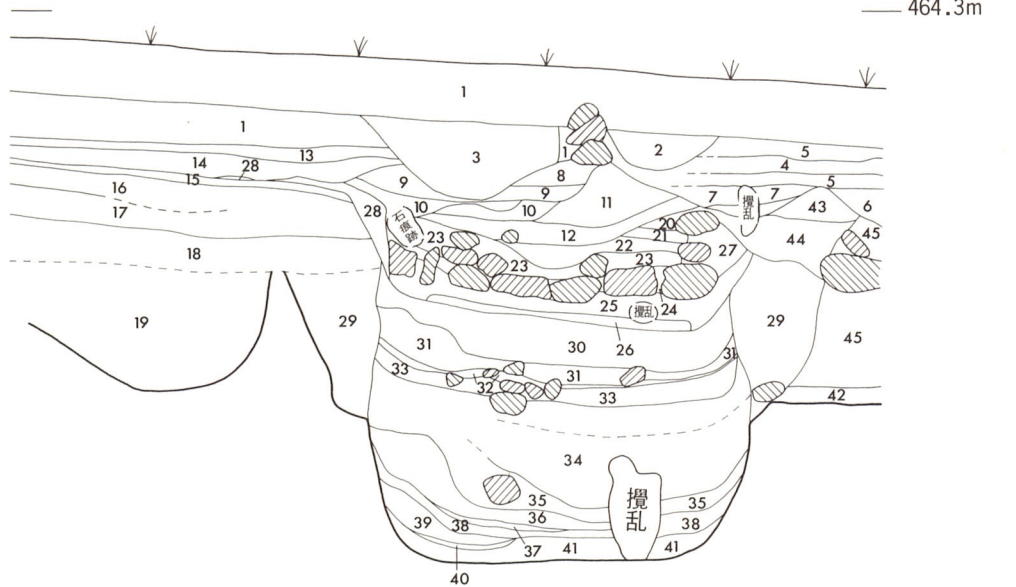
選鉱遺構

選鉱の遺構・遺物としては、まず鉱石を粉碎する臼がある。石見銀山で通称「要石（かなめいし）」と呼ぶ磨臼で、作業面上で1個検出し、原位置を保たない要石は数個出土している。また回転臼の破片が数個あり、これが粉碎用の臼になるのかは今後の課題である。

鉱石の粉碎後水中で比重選鉱が行われるが、その作業をおこなった遺構と考えられる土坑がある。1号石積土坑は、一辺が1 m前後、深さ45cmを測る正方形の土坑である。半裁調査のため全体はわからないが、確認したところでは石は三段に積み上げられ、石の間は粘土で充填し、土坑底は固く締まっている。土坑内の土層は、2・3層がともに均一な砂粒と粘質土である水性堆積と観察され、比重選鉱後のユリカスが堆積したものと考えられる。3号土坑は一辺



第9図 第Ⅱ調査区遺構配置図 (1/200)



II区溝跡 土層

- 1 黒褐色土 やわらかい、石をほとんど含まず、耕作土か？
- 2 暗黄褐色粘質土 溝跡埋土
- 3 1層と同様 土坑埋土
- 4 赤褐色砂 ゆりかす状、固くしまる
- 5 赤褐色スリ層 径3cm以下
- 6 黒褐色砂(ゆりかす)と桃色粘土の互層
下部はマンガンで固くしまる
- 7 6層と同じ
- 8 暗黄灰褐色粘質土
- 9 桃色粘土 黒褐色砂(ゆりかす)との互層
- 10 9層と同じ
- 11 9層と同じ
- 12 黒褐色砂(ゆりかす)
- 13 桃色粘土 ゆりかす砂層はさむ
- 14 桃色粘土・ゆりかす・スリ(径3cm以下)の互層
- 15 灰黄色粘質土 固くしまる
- 16 暗灰色砂質粘土 黄色粘土・白色粒子・炭含む、固くしまる
- 17 16層と同じ
- 18 16層と同じ
- 19 16層と同じ 小礫多く含む
- 20 灰褐色砂質粘土 桃色粘土・白色粒子混入、固くしまる
- 21 20層と同じ
- 22 20層と同じ
- 23 黒褐色砂質土
- 24 黄色粘土 固くしまる

- 25 暗桃灰色粘土 上部に一部砂層
- 26 灰色粘土 木質一部残る、板痕跡か？
- 27 24層と同じか？ 竹根でやや不明瞭、固くしまる
- 28 黄色粘土 固くしまる
- 29 黄色粘土と灰色粘土の混土層 固くしまる
- 30 黒灰褐色砂質粘土 白色粒子多く含む、埋め土か？
- 31 赤桃色粘土と暗灰色粘土の互層
- 32 灰黄色粘土
- 33 暗灰色粘土とゆりかすの互層
- 34 黄色粘土と暗桃灰色粘土・ゆりかすの互層
- 35 暗桃灰色粘土 黒色ゆりかす砂層はさむ
- 36 37層と42層の互層
- 37 黒褐色粗砂 ゆりかすか？
- 38 明赤桃色粘土
- 39 桃灰褐色粘土 ゆりかす層はさむ
- 40 37層と同じ
- 41 桃灰色粘土 砂層はさむ
- 42 灰黄色粘質土と黄色粘土の混土層 砂礫混入
- 43 灰黄色砂質粘土 固くしまる
- 44 黒褐色砂質土 固くしまる
- 45 灰黄色粘質土 礫含む、固くしまる

第10図 第II調査区溝跡土層断面図(1/40)

が1.3~1.5mの正方形に近い土坑で、2層はユリカスと灰色粘土ブロックを包含する層である。断面の土層の観察から、1号石積土坑と同様に水性堆積を示すものと観察された。この土坑の底は粘土層で、粘土を貼って築かれたと考えられる。土坑底の表面は、鉱石中に含まれるマンガン分と鉄分により、茶色や黒色に変化している。

この土坑の性格については、土坑の中で直接比重選鉱をおこなうか、または半切桶の中に水を入れて比重選鉱を行なう際に水を溜め置くという、二つの場合が想定されよう。どちらの場合にしても吹屋内部の施設であるため、土坑内に溜められた水は比重選鉱だけでなく、精錬など他の用途にも使用されたと推測される。

(2) II区

II区はI区の北側50mの谷部に設定した調査区で、調査前に露頭掘りあるいは排水施設と想定していた大きな窪地が存在する。調査はこの窪地状遺構の性格を明らかにすることを目的として、トレンチによる土層観察後、平面的な発掘を実施した。また、窪地東側のテラス状遺構

については斜面部を中心にトレンチ調査を行い、窪地南西側に存在する小山状の高まりについても遺構の有無を確認した。以下では窪地状遺構と溝状遺構について、概要を記しておきたい。

窪地状遺構

まず、調査区北端に窪地を横断する形でのトレンチ調査を実施したところ、窪地は二段構造であることが判明した。その後南東部の4分の1を平面的に下げ、遺構検出を試みた結果、南北方向に主軸を持つ大規模な遺構であることが判明した。上部は崩壊しているため正確な規模は不明であるが、下半部の壁面が同様な角度で立ち上がるものと仮定すれば、東西幅は14m前後を測るものと推定される。南北長については、調査区外の地形も考慮して、約15mを測るものと推定している。上段部の底面は平坦に加工されており、東西幅は7mと推定される。またこの面の北端中央部には上面に小孔を持つ箱形の造り出し部分が認められ、ほぼ主軸ラインに位置する。下段部は底面付近が非常に硬化しており、完全に掘りきることはできなかったが、上端で幅3m、下端で2m前後を測る。遺物は堆積土中からわずかに陶磁器・古銭（寛永通宝）等が出土しているが、遺構の時期を決定するものとは言えなかった。

溝状遺構

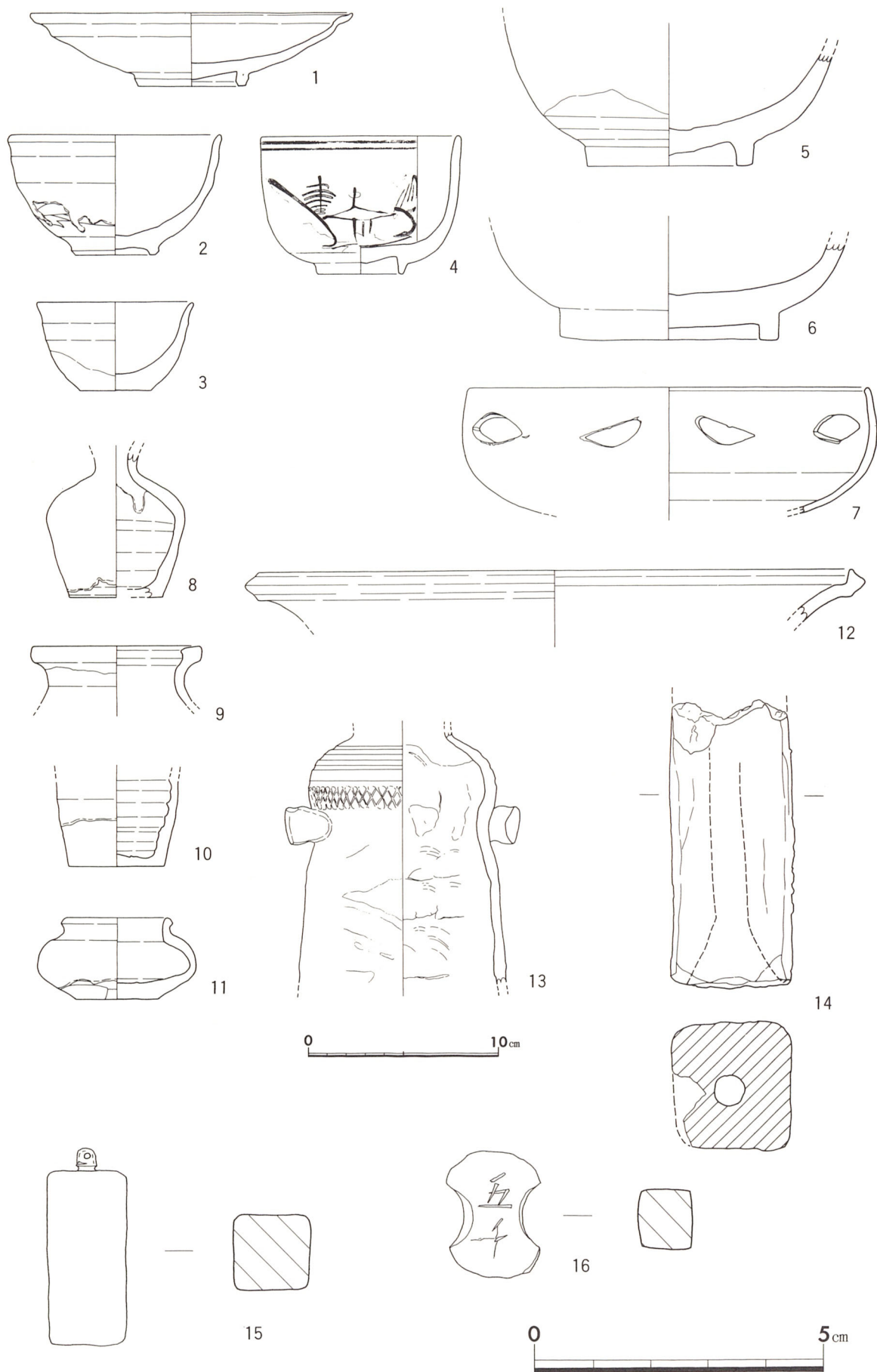
上記した窪地状遺構の南側壁面、及びⅡ区南半部の調査区では複数の溝を検出している。このうち南半部で検出された最上層の溝は、耕作によるものと判断しており、これに関連する石列も確認された。下層で検出された溝は断面観察により、整地面を伴っていることが判明しており、周辺部の造成と共に溝が造り直されているものと考えている。また、窪地壁面で検出されたもので最も大型のものは、旧地形で谷底にあたる位置に走っているものと考えられ、規模は幅2m、深さ1.5m以上を測る。この本線水路とも言うべき溝は少なくとも2回の造り替えが行われており、2回目には大型の石材によって底と側壁を構築している。また床面石敷の下には厚さ4cmの有機質部(26層)が認められ、板材による施設が存在していたものと考えている。

各溝の堆積物はそれぞれ異なっており、シルト～砂粒～小礫状の様々なユリカス・ズリで構成されているように観察された。また、大溝の堆積物(34から41層)はほとんどがユリカスと考えられる水性堆積であり、溝端が(少なくともある時期には)遮断された状態であったと考えるのが自然であろう。この点は、実際にサブトレンチ部分で遮断物らしき板材痕跡を確認しており、今後の調査の上で留意すべき点である。

これらの溝の設置開始時期は、少なくとも戦国期にまで遡るものと推定しており、18世紀には畑地として利用されていたものと考えている。

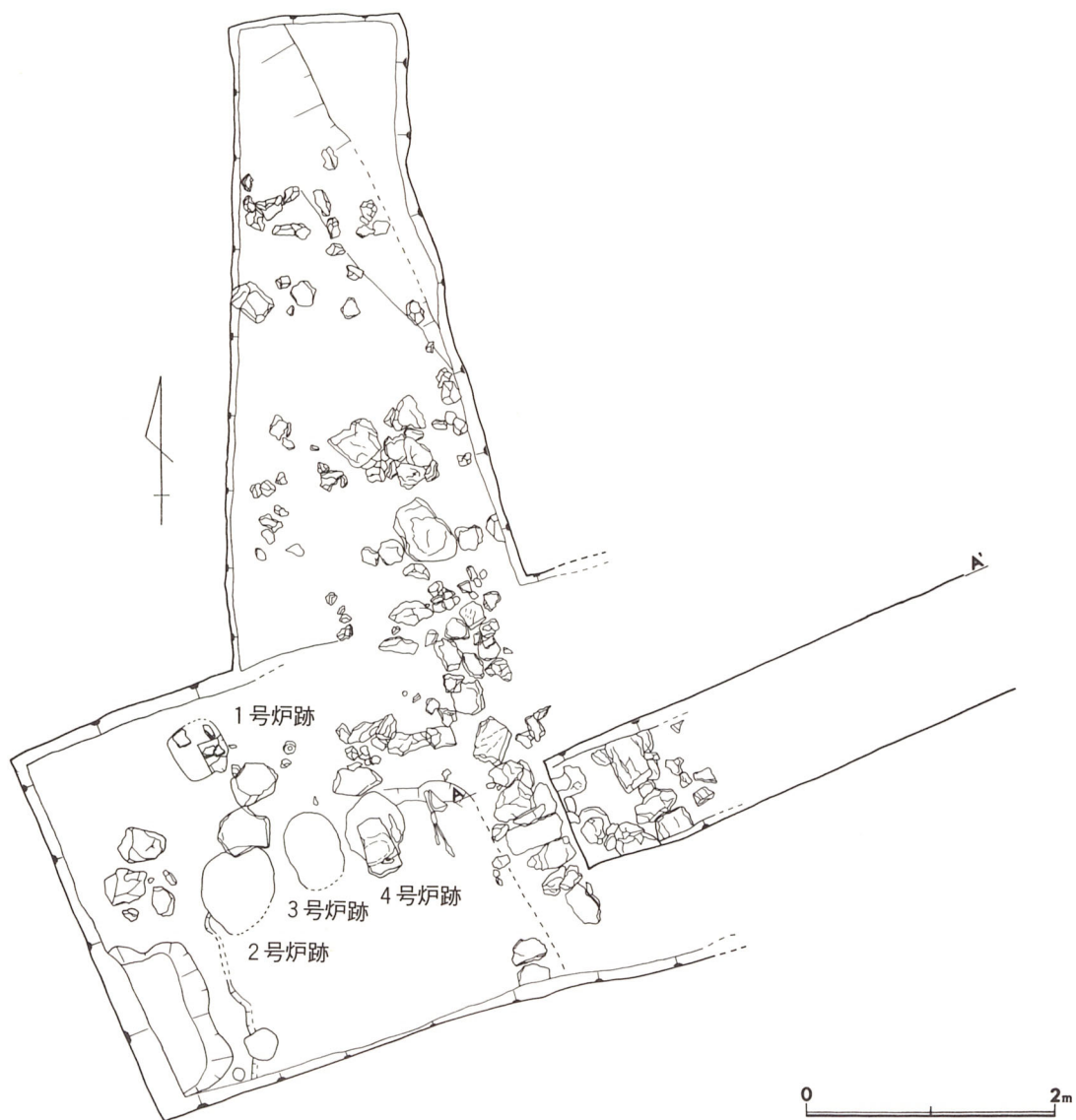
(3) 出土遺物

第11図1～6はいずれも肥前および肥前系陶磁である。1は灰釉の溝縁皿で復原口径16.8cm、器高3.8cmを測る。内面に胎土目当ての痕跡が2ヶ所確認できる。2は藁灰釉の碗で、口径10.8cm、器高6.8cmを測る。3は小杯で、口径8.6cm、器高4.7cmを測り、底部に糸切りの痕跡がのこる。4は肥前系陶胎染付碗である。口径10.6cm、器高7.3cmを測り、内外面とも施釉され外面には樹木を模した絵の染付けがある。高台底部には砂が付着している。5・6とも胴部から高台にかけて残存し、5は高台外径は8.7cmを測り、内面に胎土目当ての痕跡がのこる。6は高台外径9.6cmを測り、高台底部に砂目当ての痕跡がある。7は胴部に透しをもち、青灰色に施



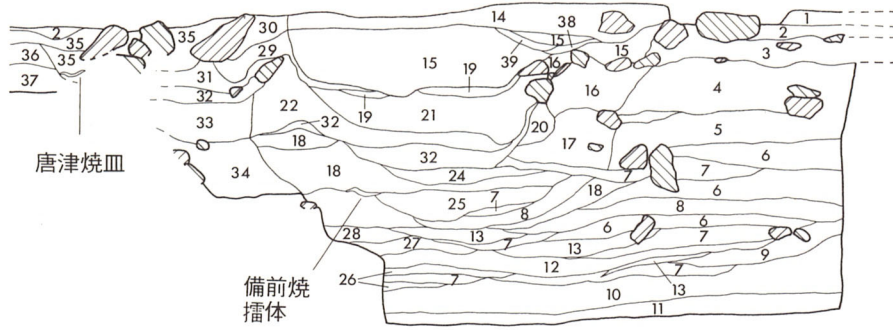
第11図 第I・II調査区出土遺物実測図(1/3)

釉された磁器片である。器種は碗か鉢と思われるが、産地は肥前系であろうか。破面には漆が付着しており、破損後に修復され再使用されたと推測される。口径は21.4cmを測る。8～13は肥前・肥前系陶磁である。8は鉄釉の小壺で、口縁は欠くが現存の器高は7.6cm、底径4.8cmを測る。9は小壺の口縁部で、口径8.8cmを測り、鉄釉と藁灰釉の掛け分けである。10は小壺の胴部から底部にかけての破片で、暗緑色の施釉である。底径5.0cmを測る。11は小壺で、口径5.4cm、器高4.3cmを測る。内外面とも暗緑色から暗青色の施釉である。12は摺鉢の口縁部である。13は朝鮮唐津耳付花生の胴部の一部である。白濁色の藁灰釉と鉄釉を掛け分けている。14は羽口である。先端部を欠くが、吹子の木呂竹と結合する部分は完全な形である。形状は外形がほぼ直方体で、断面は正方形に近い台形である。通気孔は直径が15mm前後で、木呂竹との結合部分は孔が円形から方形に近くなり、一辺が最大で51mmを測る。15は竿秤の錘である。直方体で一辺が13mm、長さ31mm、重量40.48gである。16は天秤秤の分銅で、重量の「五□(匁)」と刻んであり、重量は17.98gである。



第12図 第I調査区遺構配置図(1/60)

A — 466.70m — A'

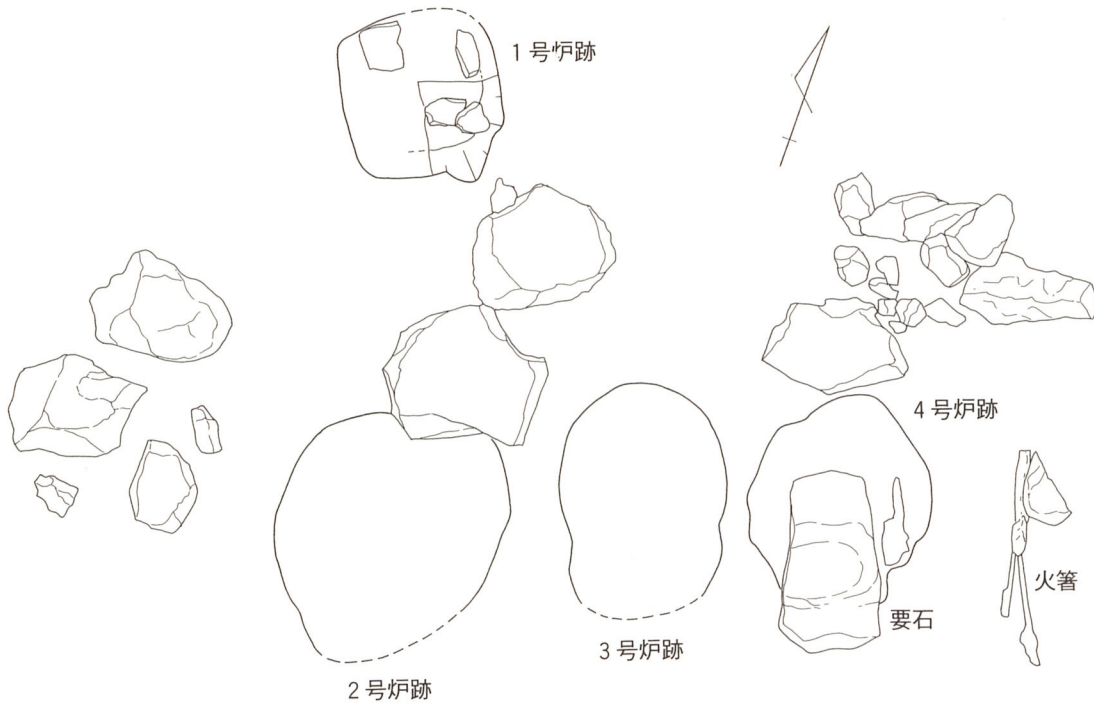


0 2m

I区トレンチ 土層

- | | | |
|----------------------|---------------------|-------------------|
| 1 明褐色粘質土 砂粒混入 | 14 小石層 | 27 灰色粘質砂 |
| 2 明褐色粘質土 明灰赤色土小塊混入 | 15 暗褐色砂 ゆりかす | 28 灰色粘土 |
| 3 褐色粘質土 砂粒・明灰赤色土小塊混入 | 16 灰黄色粘質砂 | 29 灰褐色砂 ゆりかす |
| 4 明黄褐色粘質砂 小石混入 | 17 明黄褐色粘質砂 ブロック状に堆積 | 30 赤灰色粘質砂 |
| 5 明黄褐色粘質砂 砂粒混入 | 18 明灰色粘質土 | 31 暗灰色粘質土 |
| 6 暗黄灰色粘質土 | 19 灰黄色粘質砂 ゆりかす | 32 暗橙色粘質土 |
| 7 黒色マンガン沈澱層 | 20 灰色粘質土 | 33 暗赤色粘質土 |
| 8 明灰色粘質土 | 21 黒褐色砂 礫多数混入 | 34 暗オリーブ褐色粘質土 |
| 9 灰色粘質土 | 22 黒褐色粘質砂 礫多数混入 | 35 明褐色粘質土 |
| 10 黒灰色粘質土 砂混入 | 23 橙色粘質土 | 36 褐色粘質土 礫・小石多く混入 |
| 11 茶灰色粘質土 | 24 灰色粘質土 | 37 明灰褐色粘質土 |
| 12 灰色砂質土 | 25 暗黄色粘質土 | 38 暗灰黄色粘質土 |
| 13 黄色砂質土 | 26 灰色砂 | 39 暗灰褐色砂 ゆりかす |

第13図 第I調査区トレンチ土層断面図 (1/60)



0 1m

第14図 第I調査区1~4号炉跡平面図 (1/20)

1はⅡ区サブトレンチ内、2はⅠ区C-18グリッドの3号土坑内、3・4・6、8～13、15・16はⅠ区の表土および遺構面から出土している。5はⅡ区の大溝内ユリカスの堆積から、7・9はⅠ区坑口前のズリの堆積からの出土である。14はⅠ区2号炉、3号炉の出土である。この羽口については同一個体であり、2つの炉からの出土を考えると、どちらかで使用し破損した羽口を下部構造として使用したか、あるいは全く別の炉で使用され破損した羽口と推測される。

3. 平成9年調査の概要

(1) Ⅰ区

今年度の調査は、平成8年度の調査区と重複する部分とその周辺を拡張するかたちで調査をおこなっている。調査面積は、550㎡である。

調査地は、仙の山の東側の谷部の平坦地で、谷の底の幅20mを測り南北方向に細長い場所である。南側には本谷が、北側には清水谷が続いており、現在の山道もそこから石銀地区の中へ伸びており、調査区の中ほどで道が分岐し西側へ続いている。この場所で道が交差していることから当時の町の中でも中心となる場所と考えられ調査区を設定した。

調査の結果、第Ⅰ調査区では南北方向に緩くカーブして走る幅2～3mの道を検出している。道路の東側の建物跡については、平成8年度に調査を行っており、今年度は道の西側の建物跡とその中の炉跡について調査を行っている。道の両端には建物と区画するための石列が並べられている。平成8年度の調査で、トレンチにより建物跡の中に炉跡が3基存在することが確認されており、その炉跡を検出し、形態、構造を明らかにするために調査を行った。

道 跡

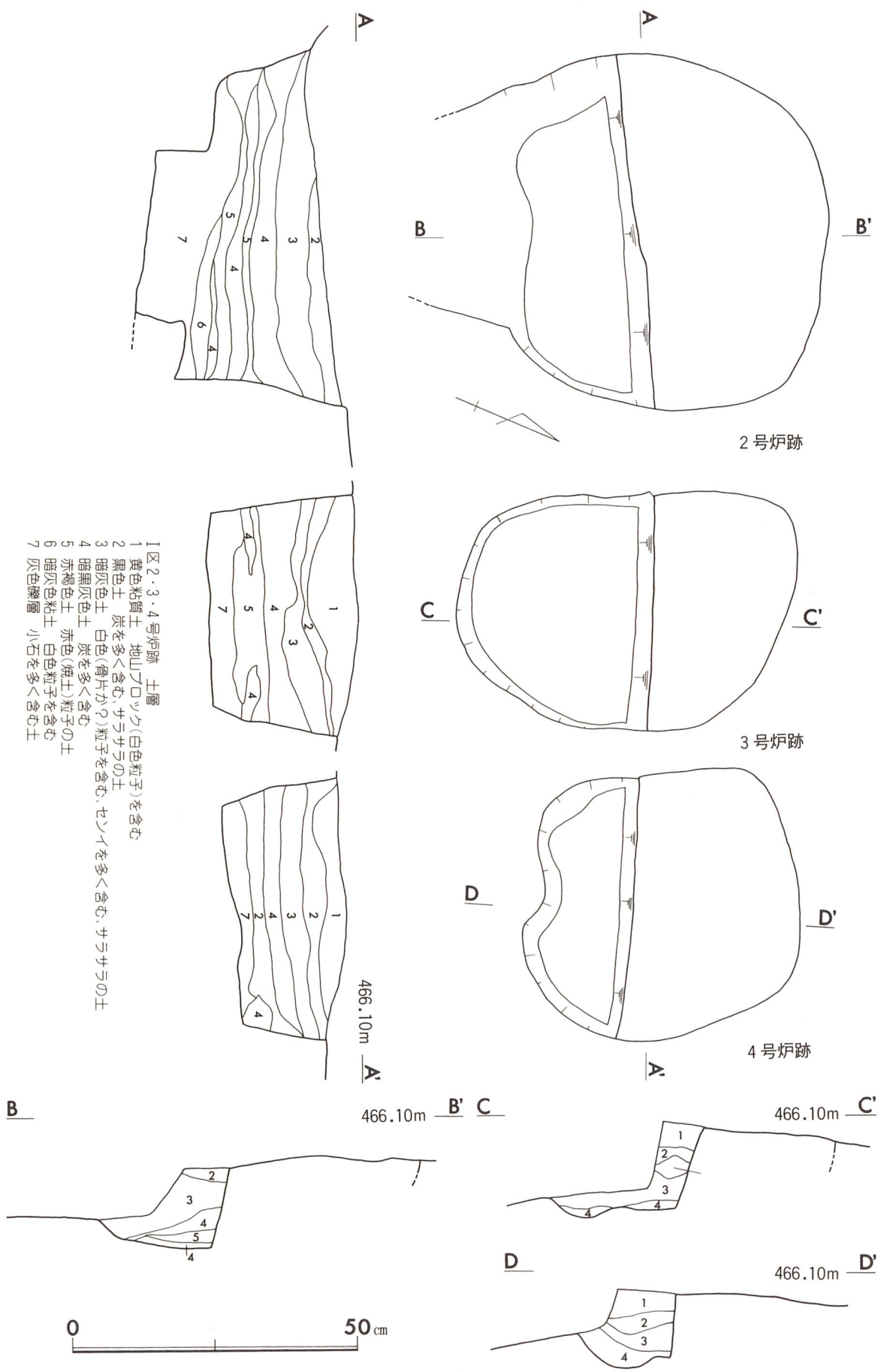
表土を除去した後に確認した、幅2.0mに小石を敷き詰めた道跡である。道の両端には石列があり、この石が建物と道の境界になっている。道の下には、溝があり幅1.5m、深さ0.35mを測り、その溝内にはユリカスが堆積している。この溝の上面から1.3m下層まで溝が最低5回作り替えられている。下層の建物から何回かの立替えにより盛り土がされ、古い時代の建物、溝が埋められた結果と思われる。上層においては、唐津焼皿が出土しており江戸時代初め頃と考えられる。また、トレンチ内からは、備前焼播鉢(24図13)が出土しており戦国時代末の時代と思われる。

1号炉跡

1号炉は、上層の遺構面において検出しており、平面形は正方形の角に丸みを持つものである。南壁の一部が屈曲しており、ややいびつな形となっている。炉は、一辺40cm、深さ9cmを測り、覆土は、黒色と灰色の土が入っており、底には灰らしきものもみられた。炉内には、拳大の石が4個出土している。この炉の近くからは唐津焼の皿が出土しており、この遺構面の時代は江戸時代初めと考えられる。

2・3・4号炉跡

1号炉と礎石列を挟んで南側の一段下層の遺構面において3基の炉跡が並んだ状態で検出している。礎石列より南側は、黄色粘土が建物床面に貼られており、黄色粘土を掘り込んで炉が築かれている。炉跡は、西から便宜的に2・3・4号炉としている。



第15図 第I調査区2～4号炉跡実測図(1/10)



第16図 第Ⅱ調査区遺構配置図(1/125)

2号炉は、75cm×62cmの大きさを平面形が楕円形を呈している。炉内には、上から黒色土、暗灰色土、赤褐色土の順で堆積している。黒色土は、ほとんどが炭でできた土と思われる。暗灰色土は、重量の少ない土で食物繊維を多く含み、白色の骨もしくは貝殻の粒子と思われるものを含んでいる灰の層と考えられる。赤褐色土は、焼土の粒子でできている。最下層には、小石でできた灰色の礫層が厚く堆積している。

3号炉は、61cm×42cmで、長めの楕円形を呈している。炉の上部には黄色粘土が堆積している。この土は、地山の白色粒子を含んでおり、床面を構築している粘土とは異なる土である。

4号炉は、50cm×46cmで、正方形の角が丸い形である。3号炉と同様に上部に黄色粘土が入り、黒色土、灰色土が互層に入っている。2・3・4号炉とも壁は垂直に近く立ち上がるものである。4号炉の一段上部には要石があるが、これらの炉跡より後の時期のものである。炉跡の直上からは鉄製品が出土している。破片のため形態は判らないが、薄い板状のもので、鍋の可能性もあるものである。また、4号炉の東側20cmのところから鉄製の火箸が出土している。炉の横に位置することから精錬の際に使用された可能性がある。X線写真によると、箸2本が途中で錆びついており、頭部は輪状にし、円形に加工したリング状のもので繋いでいる。この遺構面からは、中国製陶磁器の青花・皿（24図1、2）、唐津焼の皿（24図3～7）が出土している。唐津焼の皿は、胎土目と砂目当て痕の両方が出土していることから、時期は江戸時代初めと考えられる。これらの皿には、炭化物が付着したものが多くいることと炉跡の付近で出土していることから、精錬に使用した可能性がある。

2・3・4号炉の南側は、黄色の粘土層と黒色の炭化物層が互層に敷き詰められており、炉を築くために除湿を考えて床面を作ったものと思われる。3基の炉の上部は2.5×2.0mの範囲に礫が敷かれた状態であった。

坑口前トレンチ

上層の1号建物の南側、坑口前に設定したトレンチは、当初は坑道の採掘と建物の前後関係をつかむために掘ったものである。

坑道は古い時期から掘られていたと思われ、建物床面の何回かの作り替えにより盛り土がされ、坑道も埋められたようである。ある程度埋まった後に再度坑道の掘り直しをおこなったようであり上層の建物の床面から斜めに流れ込む土（第2層）がある。この土層の中には拳大から人頭大の石が多く含まれている。坑道の入り口付近は、幅1.4mで溝状に掘り込まれている。溝の中には人頭大かそれ以上の大きさの石で埋められており深さは確認できていない。仙の山の銀の鉱脈は東西方向に存在していることから、この溝は鉱脈を追って掘った跡と思われる。

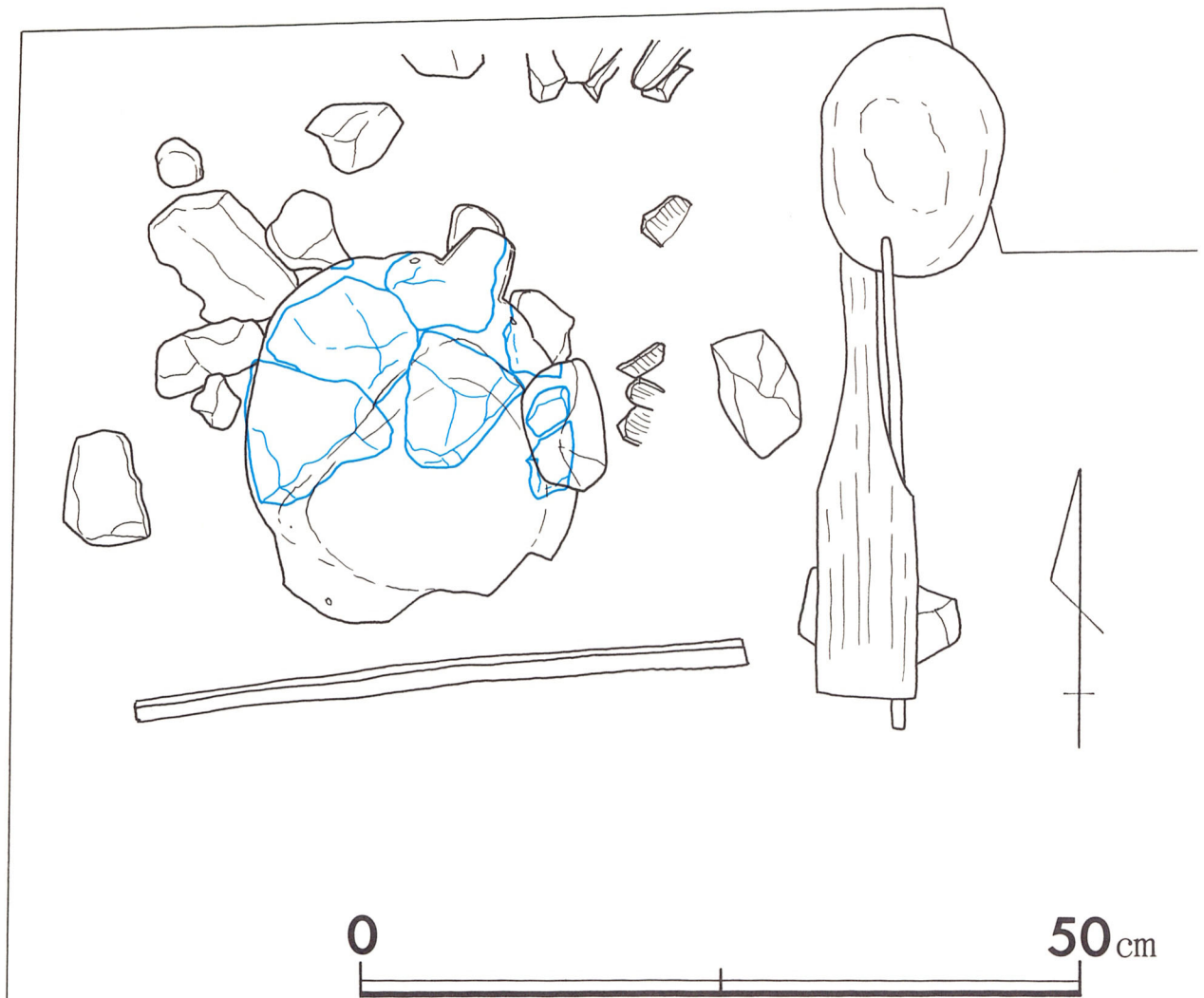
上層の建物跡は褐色土（15層）を床面としており、その下層の第4層の黒色マンガン層までは唐津焼を含んでいる。

下層建物は、黄色砂礫層を床面とした礎石建物跡である。礎石は東西に並ぶ3基の礎石を確認している。柱間は90cmで、真中の礎石には柱がずれて床に突き刺さった状態であり、東側の礎石には柱材が乗ったままの状態を検出している。東側の礎石の横からは長さ65cmの柱材が出土している。中央の礎石と東側の礎石、東側の礎石から北側へ土壁が土圧で押し潰された状態であった。中央の礎石と東側の間は、小指大の径の竹が直立しており、それぞれの竹を繋ぐ様に棒状の木も検出している。木舞の土壁が残ったもので、東側の礎石でL字状に壁が残ってい

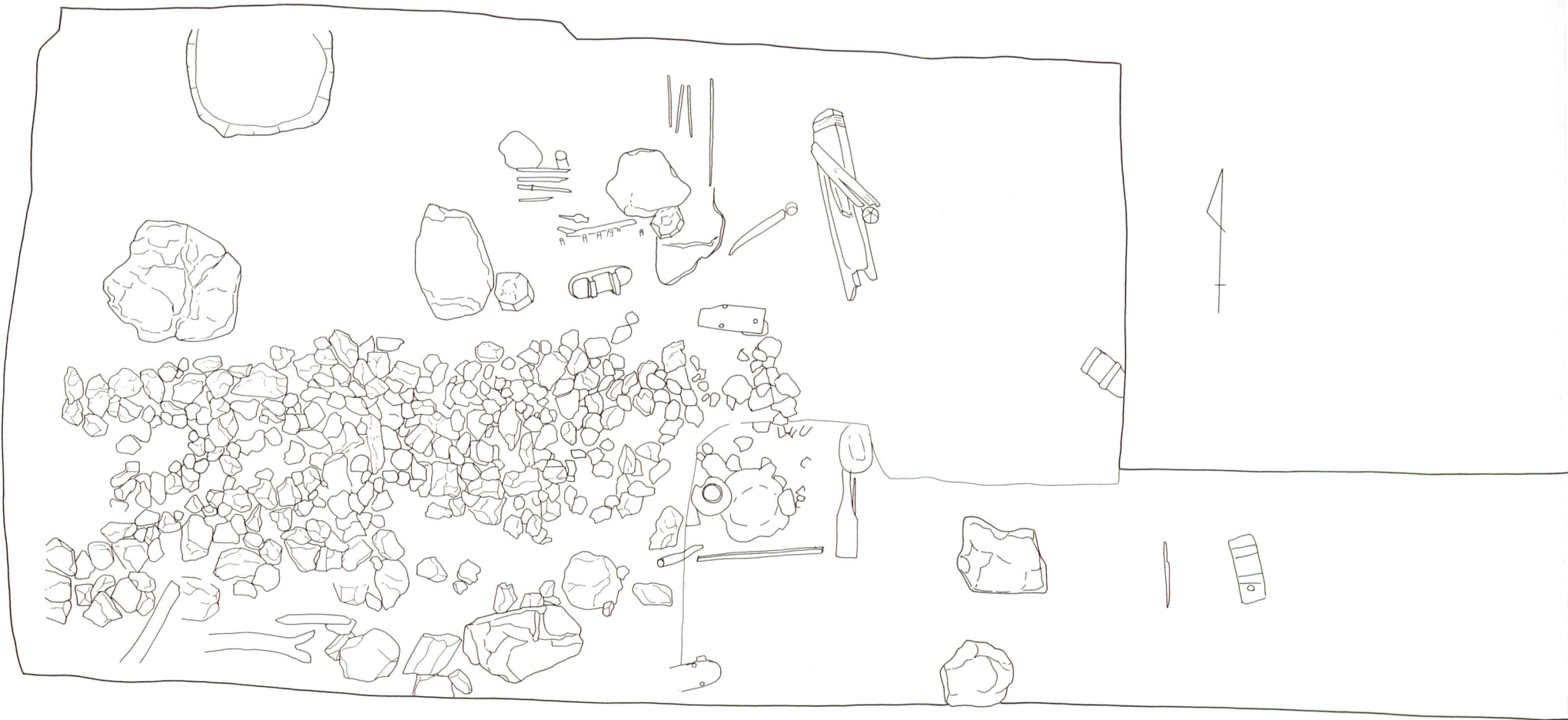
る。礎石列の南側には礎石1基を確認しているが、その間に幅90cmの石敷がみられた。この石敷は、西側へ向け傾斜しており、西側が25cm低くなっている。建物の床面上には、黒灰色粘質土が堆積しており、削ぐ板の屋根材や繊維質の腐食したような有機質のものを多く含む土である。この土の中に、下駄、漆塗椀、横櫛などの木製品を含んでいる。トレンチの北壁セクションに係る場所で柱材が出土している。これと対になる柱材が幅90cmの位置から出土している。

下層建物跡を厚さ20cmの白色粘土が埋めて建物の床面が作られており、そこに炭が入った炉跡が確認されている。一辺50cmの方形の炉跡であり床、壁ともに粘土で作られている。深さ10cmで、なかには炭のみが堆積している。

この下層建物の床面より50cm下から鉄鍋が出土している。建物の床面の40cm四方をやや高くし拳大の礫を敷いている。この周囲の床には木を打ち込み、また2方向に板が置かれ囲っている。鉄鍋は片口が北東方向を向き、その口の方へ向けて傾いた状態で出土している。建物が壊れ、この鉄鍋が埋まる際に傾いたと思われる。鍋の東側には、鉄製の火箸が1本置かれた様な状態であり、その先端にはアワビが置かれていた。鉄鍋が使用された遺構面は礎石も確認しているが、トレンチ内のためつながりが不明である。石が敷かれた床面からは鉄鍋の足が1個出土している。鉄鍋は遺構面に原位置に置かれた状態のものが、何らかの原因により埋まったと考えられ、その内部にみられた灰状の土から銀精錬の灰吹法に使用されたと考えられる。

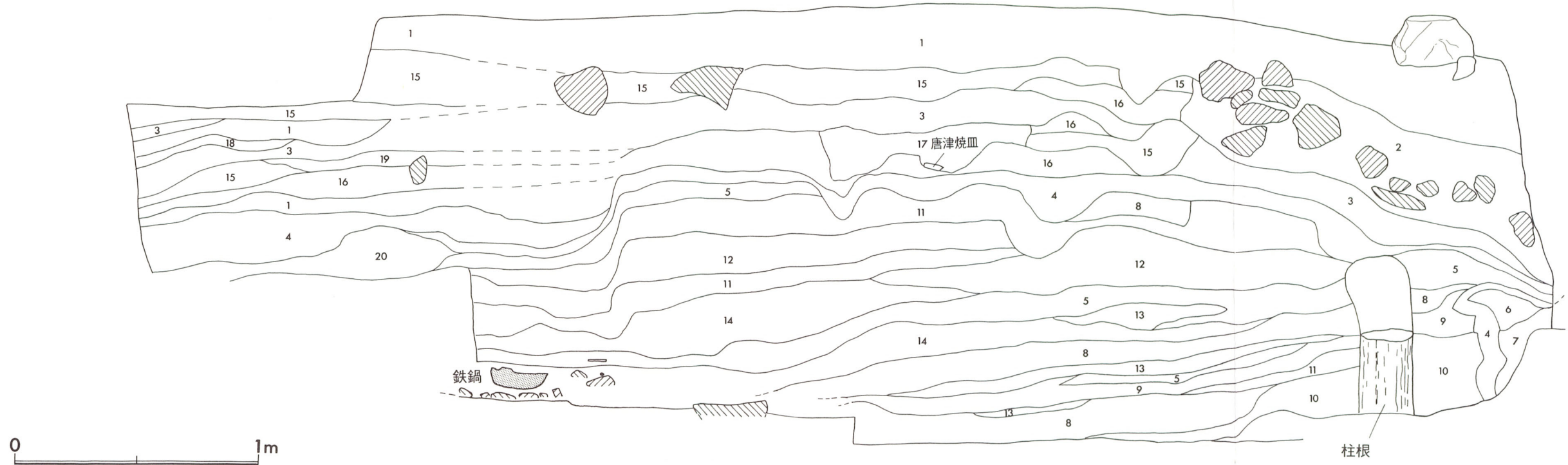


第17図 第Ⅱ調査区鉄鍋出土状態(1/5)



- Ⅱ区トレンチ 土層
- 1 暗褐色土 粒子微少、砂礫を多く含む、黄褐色粘土ブロックを含む、全体に固くしまる
 - 2 がら 最大で人頭大の自然石、坑内から運び出されたものか?
 - 3 明褐色粘質土 16層とよく似ているが粘性強い、白色小礫を含む
 - 4 黒色マンガン層
 - 5 暗灰色粘土 粒子微少、小礫・木くずを含む
 - 6 灰白色粘土
 - 7 茶灰色土 白色粒子含む
 - 8 灰色粘性砂質土 粒子微少、砂・小礫を多く含む
 - 9 黄色砂 小礫を少し含む
 - 10 明灰色粘土 シルト、粒子微少、水性堆積
 - 11 黒灰色粘質土 粒子微少、木くずを多く含む
 - 12 黄色砂礫層 拳大の礫がつまる
 - 13 黄色粘土 粒子微少、小礫を含む
 - 14 黄灰色粘性砂質土 粒子微少、砂粒・木くずを含む
 - 15 褐色土 粒子微少、粘性ほとんどなし、礫を含む
 - 16 褐色土 粒子微少、粘性ややあり、地山粘土を含むため白色小礫を含む、整地層
 - 17 灰褐色土 砂粒・小礫を含む
 - 18 黄褐色土
 - 19 灰褐色土
 - 20 灰白色粘土 礫を多く含む

466.2m



第18図 第Ⅱ調査区坑口前トレンチ実測図 (1/20)

(2) II区の調査

II区では、平成8年度調査のI・II区の間部分、約410㎡を調査した。表土除去後に精査を行って遺構面を確認し、道跡や1・2号建物跡の他、溝跡・集石・土坑・ピットなどの遺構を検出した。また、複数の炉跡をはじめとして、ゆりかすの堆積した土坑やズリの集中部分・要石など、銀生産に関係すると思われる遺構を数多く検出した。道跡と、建物跡や建物内と見られる土間面とは整然と区画されており、一帯が計画的に造成された状況がうかがえる。遺物が大量に一括出土した遺構は無かったが、包含層からは肥前系陶磁器を中心に多くの遺物が出土した。遺物から考えられる上層遺構面の時期は、おおよそ17世紀から18世紀である。

道 跡

調査区を設けた平坦地の中央をほぼ南北方向に通る。調査前に存在した道と、ほぼ同位置にあることが判明した。その途中には、分岐や合流する箇所がある。道跡は、所々残る石列によって建物跡や溝跡と区切られていたものとみられる。表面には砂利や小石が敷かれていた。土層断面の観察からは、上層・下層と少なくとも2時期あることが確かめられた。

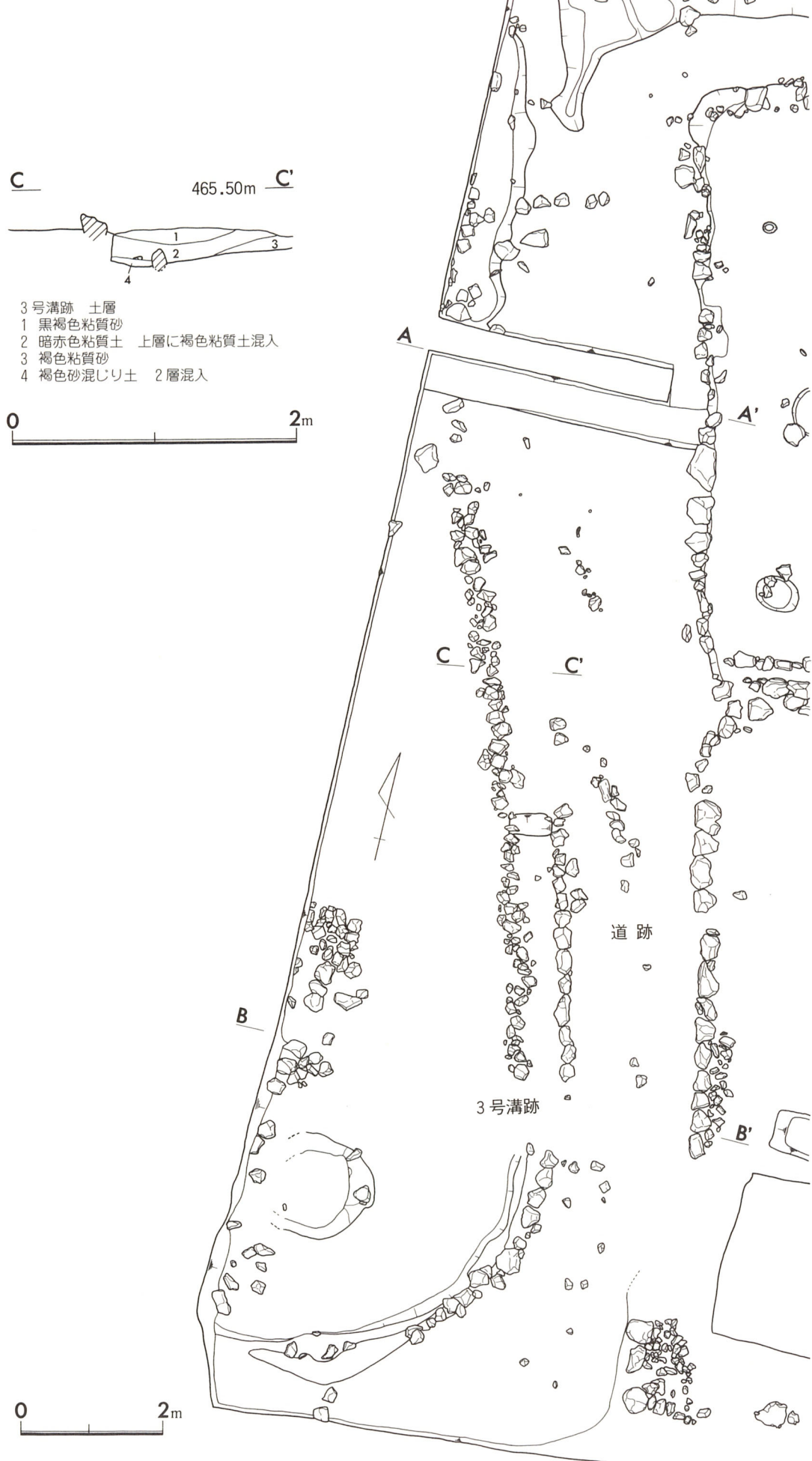
上層道跡は、幅約0.6～0.7m。F20グリッドを東西に横断し、E20グリッド北西隅で北へ折れ、E21グリッドの途中からは下層道跡と重複している。そこまでは褐色粘質土層上に砂利や小礫を敷いて造られている。非重複部分では、道跡両側に石列などは認められず、緩やかに落ち込む格好であった。F20グリッドでは道跡北側に溝跡が検出されたが、道跡上面との高低差がありすぎることから、これは下層の遺構面に伴うものとみられる。出土遺物は肥前系陶磁器が主で、時期は近世前期から中期と考えられる。表土直下にあることから、周辺の建物跡などより新しい時期の道跡であろう。

下層道跡は、上層道跡が造られた褐色粘質土層や2号溝跡を除去した後、暗赤色粘質土層の上面で確認された。南端のE19グリッドにおいて、8年度調査時に確認された道跡から北へ向けて分かれ始まる。幅1.8～2.0m、南端から北端のF22グリッド東半までおよそ33mの長さにな。途中E21グリッド内では、分岐が認められた。2号建物跡の北西隅で、そのまま北西方向へ直進する道跡と、ほぼ直角におれて東へ向かう道跡に分かれる。それぞれ幅0.7～1.0m、1.0mである。F22グリッド東半から先の部分は、集石の存在や周囲との高低差が無くなることなどから規模・方向ともわからなくなる。

分岐後東へ向かう道跡は淡黄白色土の上面に造られており、2号建物跡の北隣を通っている。周辺地形から推測すると、斜面を登って窪地東側の台地へ続いているものと思われる。道跡の北側は整形されて法面となっており、段を造るように造成されたことがうかがえる。

道跡の明確な境界となる石列は、1・2号建物跡に面した東側部分が最もよく残っている。3号溝跡との境になる西側は途中までしか残っていないが、続く部分は耕作によって取り除かれた可能性がある。また、E20グリッド内西側では、3号溝跡の上に集石が認められたが、近時の耕作に際し石が寄せ集められたものであろう。石列中の石に挟まれる状態で、石造物の破片や近世陶磁器片がみられた。道跡内にも幾つか石があったが、何らかの区切りになるものか、石列から動いたものかは不明である。

2号溝跡は、層位的には上層道跡と下層道跡の中間で検出された。褐色粘質土層に掘り込まれたもので、3号溝跡の西側にほぼ並行して存在した。ただし、下層道跡を確認するため、記



第19図 第Ⅱ調査区道跡平面図(1/80)・溝跡土層断面図(1/40)



第20図 第II調査区道跡土層断面図 (1/40)

録作成後取り除いている。長さは約14m、幅は約0.3m。埋土は橙色がかった黄褐色粘質土である。出土遺物はあまり見られなかった。時期については、近世前期から中期と思われる。

3号溝跡は下層道跡の西側に位置し、埋土は上層が黒褐色粘質砂、下層が暗赤色粘質土(ゆりかす)になる。E19グリッドからE20グリッド途中までは、下層道跡との間に石列が存在する。しかし、溝跡西側の石列が無くなるあたりから、位置・規模とも不明となり、どのように続くかは明らかにできなかった。また、部分的に下層の状況を見ると、3号溝跡の西側に別の溝跡があることが確かめられた。



第21図 第Ⅱ調査区1号建物跡平面図(1/80)

1号建物跡

道跡東側に位置し、南北に並んだ建物跡2棟の内、南側の建物跡である。現地表面から約20～30cm表土を除去したところで、石列・整地層を検出した。2号建物跡との間には約30～60cmの高さで石が積まれ、明確な段が造成されている。

建物跡を区画する石列を計測すると、間口幅は約10m、奥行きは約8mである。また、南西隅では道跡の屈曲に合わせて、石列が道側へ約1m張り出す格好になっていた。北辺の一部と南辺には礎石が残っており、それぞれほぼ1m間隔で並んでいることが確かめられた。南辺では、各礎石間に小さな石を並べており、地覆のためとも考えられる。一方東・西辺には礎石が全く残っておらず、建物の奥行きは若干短くなる可能性が高い。その場合、石列の西辺は屋根の先端位置にあたりと考えられる。約2mを1間とすると、復原される建物は、間口5



第22図 第Ⅱ調査区2号建物跡平面図(1/80)

間、奥行き3間の礎石建物と思われる。

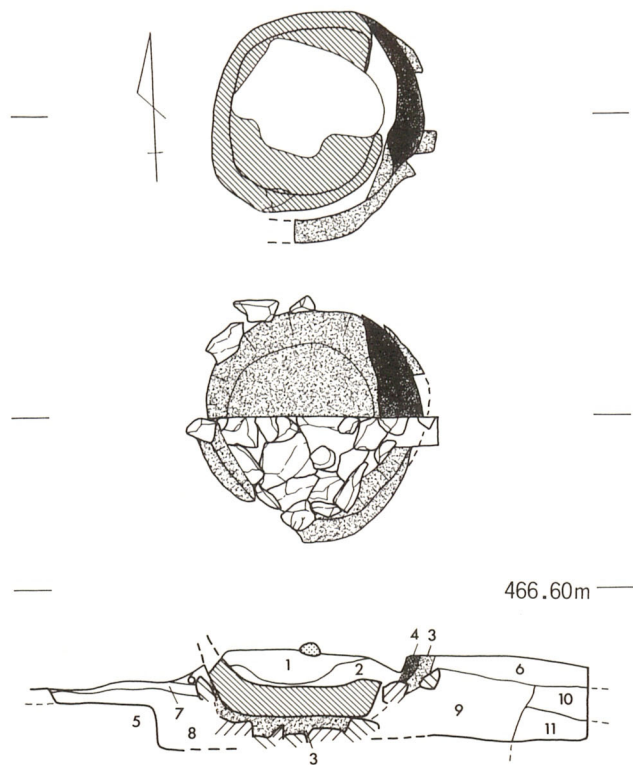
建物跡内部にも礎石は残っていなかったが、淡黄白色の粗い真砂土で整地され、建物跡北東部分にあるズリの集中部分とは明らかに区別できた。他に溝跡1条を検出したが、銀精錬に関係する遺構は検出されなかった。

2号建物跡

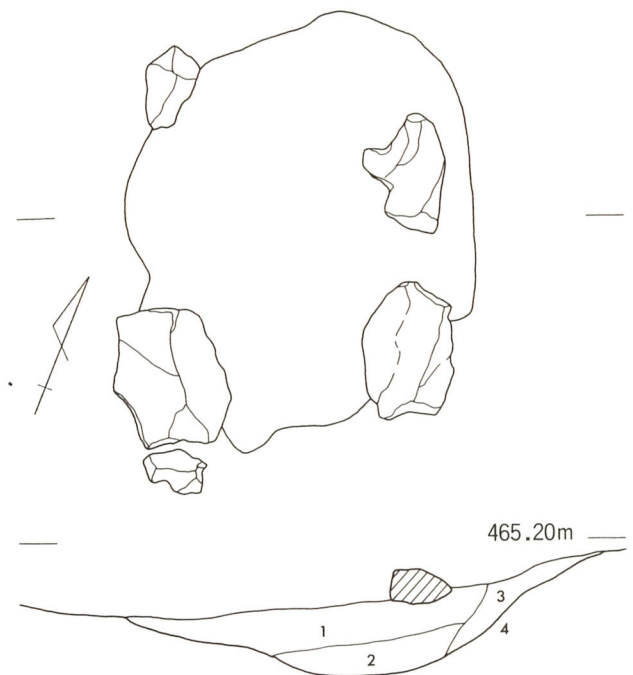
道跡東側に位置し、南北に並んだ建物跡2棟の内、北側の建物跡である。現地表面から約50～60cm表土を除去したところで検出した。

建物跡を区画する石列を計測すると、間口幅は約8m、奥行きは約6mである。石列の残存状況は、1号建物跡によく似ている。南辺では礎石の間に小石が続く石列を確認できたが、東・西辺では全く礎石が確認されなかった。また、西辺の道跡境の石列と建物跡検出面とでは約20cmの高低差があるため、道・建物間に時期差が存在する可能性もある。

建物跡内では、土間土と見られる明黄白色粘質土がほぼ全面に見られた。東側に存在するズリの集中部分やゆりかすの堆積した部分などは明瞭に区別できる。他の遺構として炉跡・要石・ピットを検出した。炉跡は建物跡東辺寄りに多く位置している。ピットの内南北中心線上



- Ⅱ区1号炉跡 土層
- | | |
|-----------------------------|--------------------|
| 1 淡茶灰色粘質土 炭化物・炉壁を含む、土間整地層か？ | 7 黒色粘質土 炭化物包含 |
| 2 黒灰色粘質土 粒子非常に細かい、灰か？ | 8 茶褐色粘質土 粒子微少、粘性強い |
| 3 明橙色粘土 被熱・混入物なく緻密 | 9 褐色粘質土 炭化物若干含む |
| 4 黒色粘質土 炭・灰混じり | 10 暗褐色粘質土 9層と同じか？ |
| 5 明黄色粘土 緻密 | 11 黒色粘質土 キメ細かい、灰か？ |
| 6 淡茶褐色粘質土 | |



- Ⅱ区2号炉跡 土層
- | |
|-----------------------------|
| 1 黒色粘質土 炭多量に含む、粘土小ブロックを若干含む |
| 2 黒褐色粘質土 炭・砂粒を含む |
| 3 灰褐色粘質土 粒子微少、砂粒を多く含む、粘性強い |
| 4 褐色砂質粘土 砂粒を多く含む、粘土、土間整地層 |



第23図 第Ⅱ調査区1・2号炉跡平面図(1/10)

にある2基は直径・深さとも他より大きく、柱穴としてみなしうる。

前述のずり・ゆりかすや要石・炉跡を関連付けて推測すると、この建物跡は銀生産の作業場所である吹屋であったと考えられる。

炉跡

F20グリッドで2基の炉跡を検出している。1・2号炉とも、Ⅱ区1号建物と道を挟んで向かい合う建物内部の作業面に位置している。この建物跡は、礎石列が一部検出されたことから礎石建物跡と考えられる。

1号炉は石製の鉢を使用した炉跡である。この鉢は底部が残るものの、胴部から口縁部にかけて、ほとんどが欠損している。底部径は18cm、厚さは底部で5cm、残存する胴部で3cmを測る、地元産と考えられる凝灰岩系の石を加工したものである。鉢の内部は1層が炭、カラミを含む粘質土、2層黒灰色粘質土は、粒子が非常に細かい土であることから、灰になる可能性がある。また鉢の周囲と底部の下には粘土が貼られ、被熱して明橙色に変化している。この粘土層の下層は礫が敷き詰めてあり、蓄熱と防湿を目的とした下部構造であろう。検出状況から判断すれば、鉢の内部が炉として使用されたと考えられる。2号炉は長径52cm、短径45cmの楕円形の範囲に炭・焼土と4個の礫が検出された炉跡で、土層断面の観察からは炉の下部構造が検出されたと推測される。

(3) 出土遺物

I 区出土遺物 (第24図)

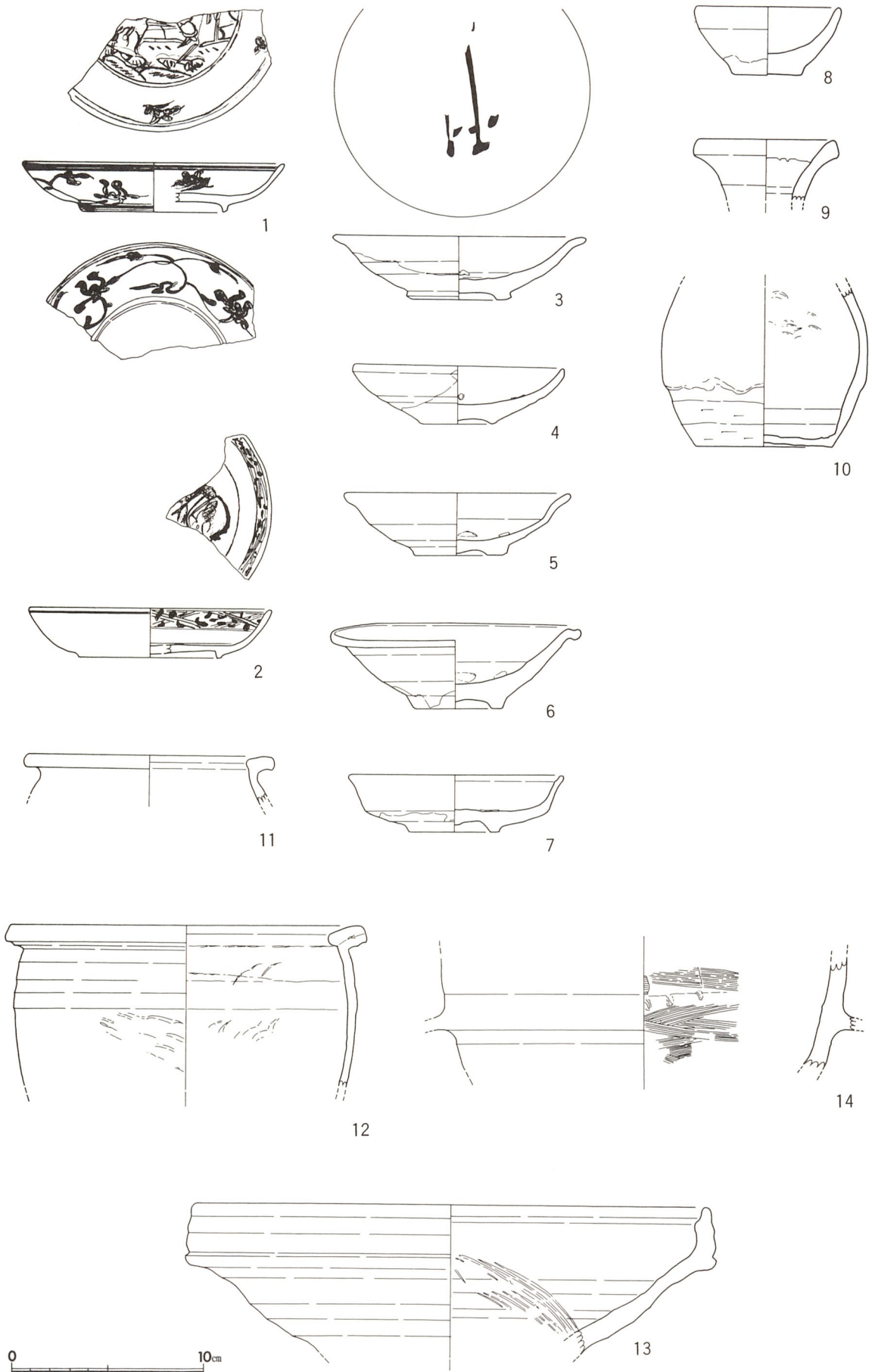
1、2は中国製青花皿である。1は外面に唐草文、内面の見込みに鳥のような絵が描かれている。2は口縁内面に四方襷、見込みには袋状のものを描いている。3～7は唐津焼皿である。3、4、5は胎土目当て痕、6、7は砂目当て痕が残る。3は、内面見込に草花文を描いている。4は、口縁部が内湾し、端部が尖っている。6は口縁部がての字状に折れ曲がり、上部に沈線が入る。8は小碗もしくは杯と呼ぶべきものである。底部外面に糸きり痕が残る。9、10は壺の口縁部と体部以下の破片である。9は外面に白色の釉薬が施されている。10は外面の底部近くまで白色の釉薬が付、縦方向の筋状に緑色の釉薬がかかる。11、12は陶器の甕で体部内外面をタタキの後ナデている。13は備前焼の播鉢で、器高が低く口縁部が上方に伸びる。

II 区坑口前出土遺物 (第25図)

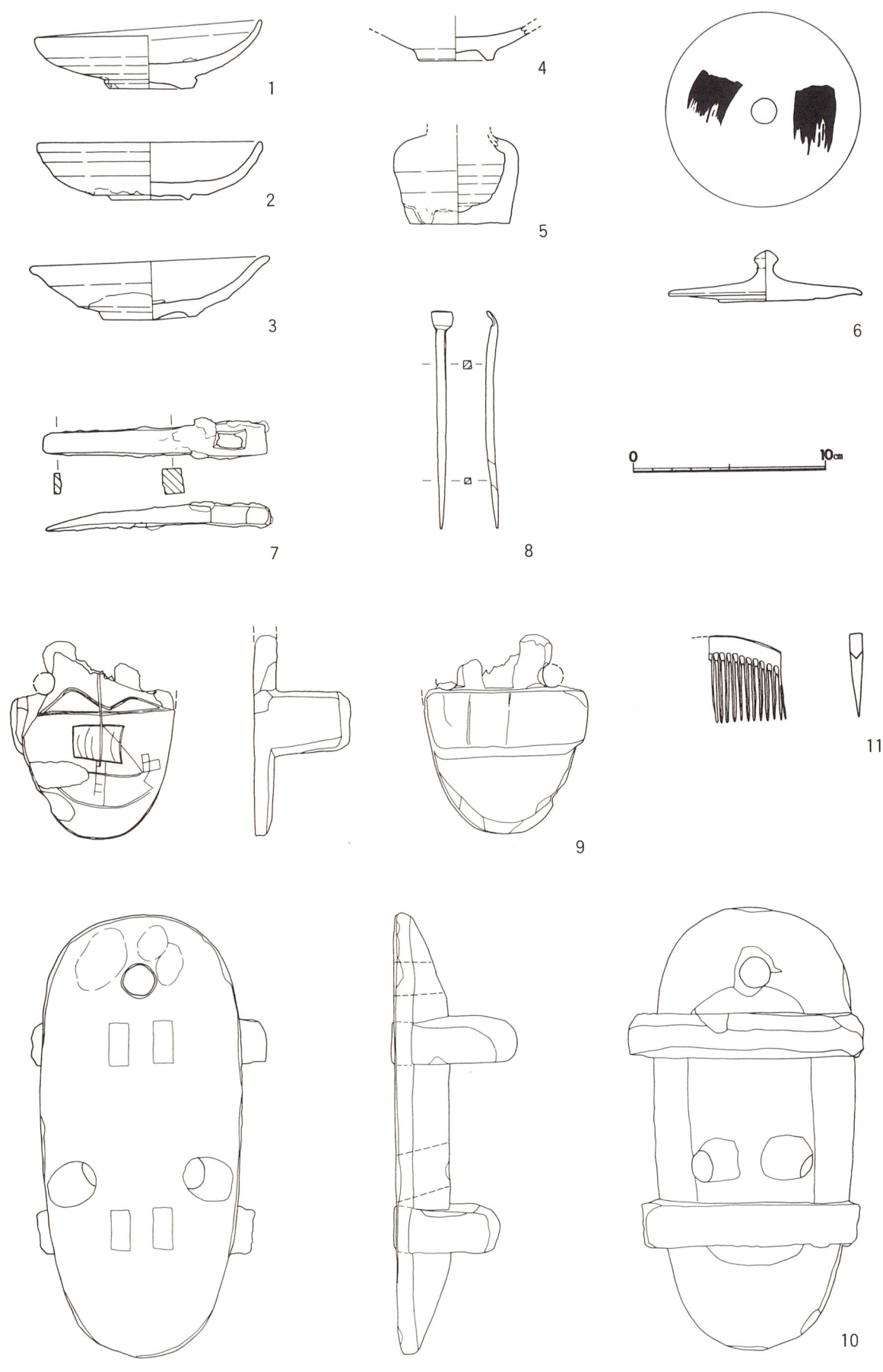
24図14と25図は坑口前のトレンチから出土したものである。8～11が下層からの出土である。14は、羽釜と思われる、内外面が黒色で外面にはススが付着している。1～3は唐津焼の皿で胎土目当て痕が残っている。4は肥前系の皿の底部で内面に砂目当て痕が残っている。内外面に白色の釉薬が施される。5は肥前系の壺で外面の底部付近まで黒褐色の釉がかかる。6は唐津焼の蓋で外面に鉄釉により文様が描かれている。7は鉄器のツルハシで刃部の摩耗が少ないことから、あまり使用されていない可能性がある。8は鉄釘で長さ11.4cmを測り、頭部が折れ曲がっていないことから未使用と思われる。9は木製の下駄で連歯造りのもので、かかとの部分で鼻緒穴2穴が残っている。歯の形状から左足用の丸下駄である。かかとの台部には山と船の絵が彫り込まれている。山は大小2つが並んでおり、手前に帆掛け船が進行方向に風を受けている様子が表現されている。マストから梯子が架けられ、船尾に向けて綱がはられている。10は差し歯下駄の右足用と思われる。台長23cm、台幅10.5cm、台厚2.8cm、歯高が前で3.6cm、後で2.6cmである。それぞれの歯は、2.2×1.0cmの臍穴が2つずつ開けられている。鼻緒穴は爪先はほぼ垂直に開き、かかとは内側前側にかなり傾斜している。台部爪先には、親指、人差し指、中指の跡があり凹んでいる。歯は使用により磨滅しており、角が丸くなっている。11は横櫛で半分が欠けている。

II 区上層建物出土遺物 (第26図)

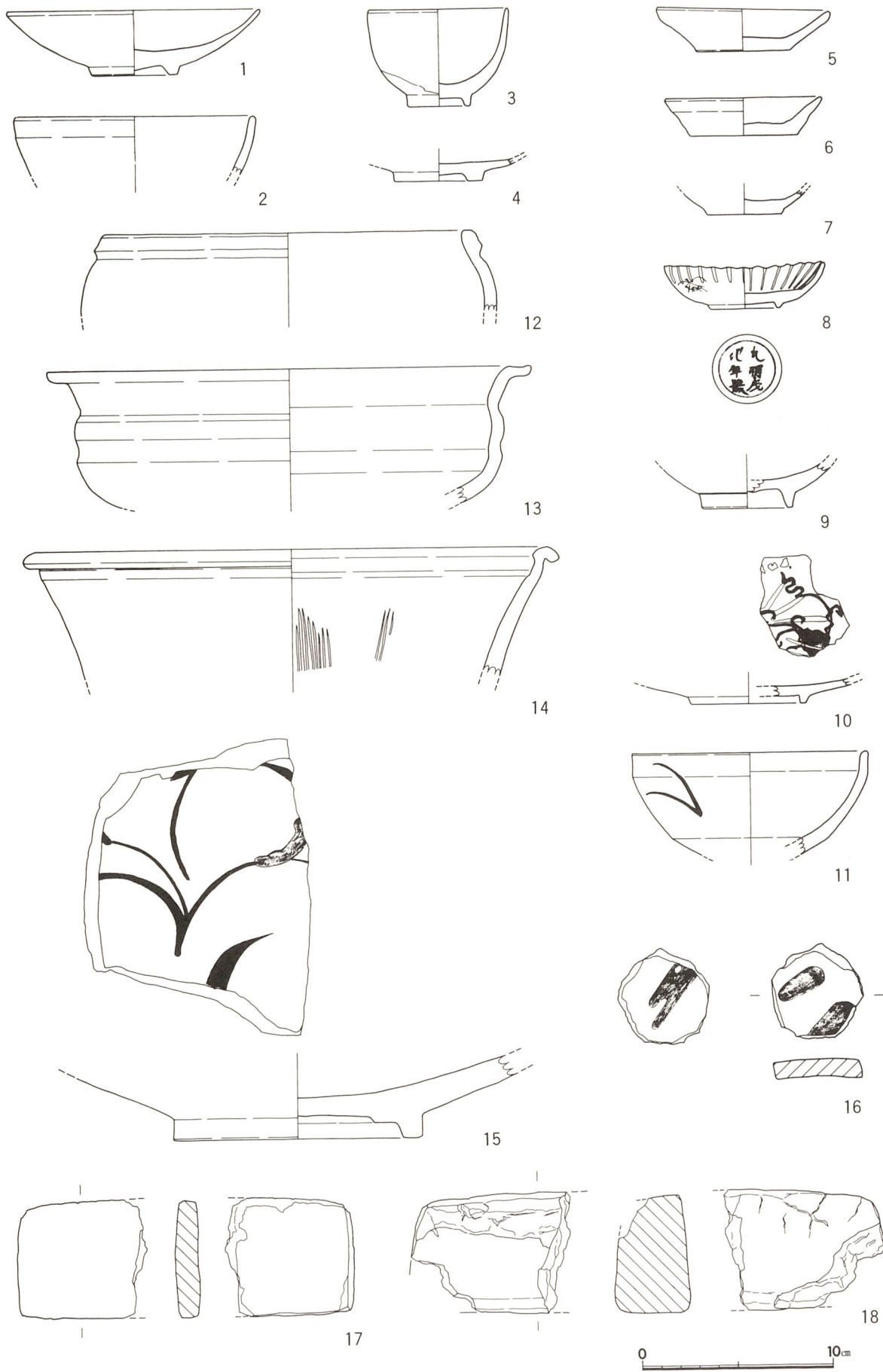
26図はII区の上層建物跡から出土している。1は唐津焼の皿で内底に砂目積みの痕が残る。2～4、11～16は肥前系陶器である。4は内底に砂目積み痕が残る。11は外面に草花文が描かれている。12、13、14は鉢である。12は口縁部がやや内傾し、内外面に施釉される。13は口縁部が外反し、上端に平坦部を有している。14は口縁部が屈曲し、体部は直線的に立ち上がる。内面に7～8条の播り目がみられる。口縁部近くのみ施釉される。15は、底径13.2cmと大形の皿で内面に草花文が描かれている。16は陶器を打ち欠いて円形にしたものである。5、6、7は土師器の小皿で底部に回転糸切り痕が残る。体部が直線的に開くものである。8、9、10は、伊万里焼で8は底部外面に「大明成化年製」と書かれた稜花皿である。17、18は土道具といわれる精錬炉の前に立て掛けて使用したものとされている。粘土を成形した素焼きの土成品である。17は幅6.2cm、厚さ1.2cmを測り片面にからみ状の溶融物が付着している。18は、幅6.3cm、厚さ4.0cmと厚いもので片面を除く3面にからみ状の溶融物が付着している。



第24図 第I調査区出土遺物(1/3)



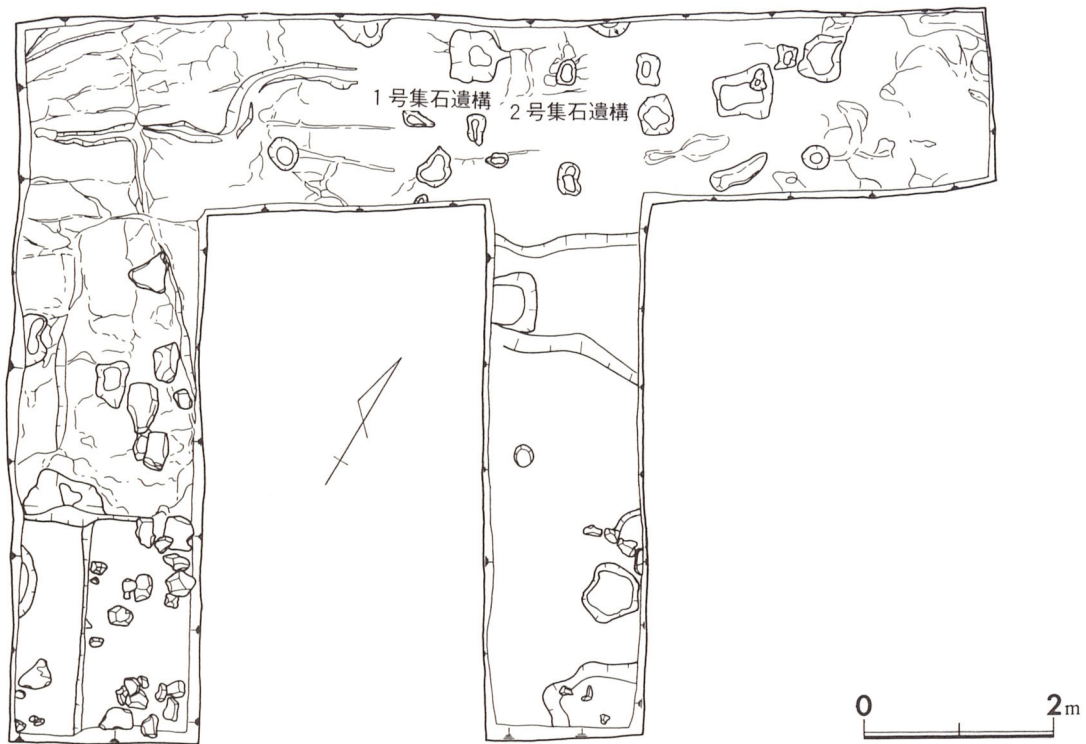
第25図 第I調査区出土遺物2 (1/3)



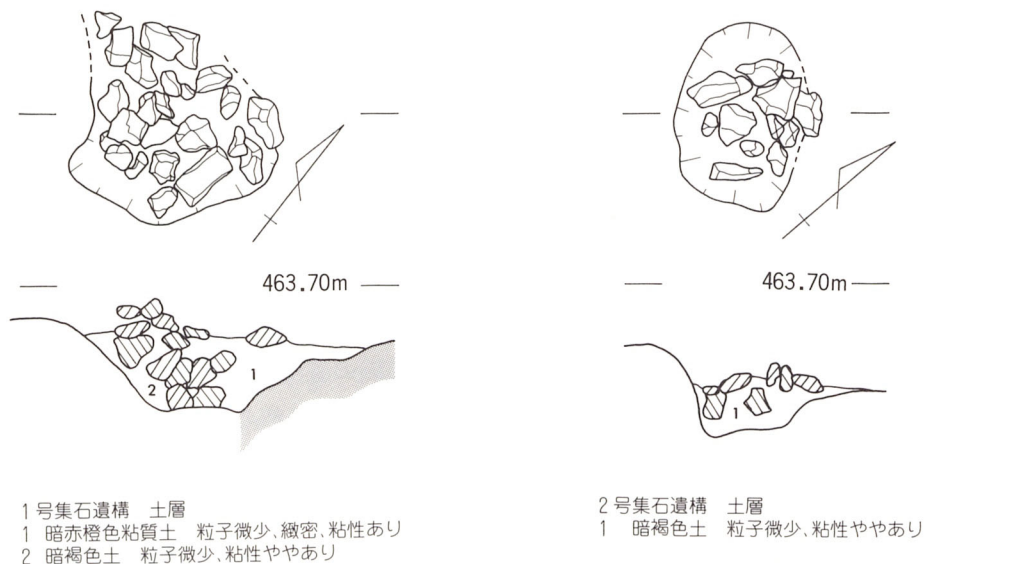
第26図 第I・II調査区出土遺物 (1/3)

(4) VII 区

VII区はII区の東100mにある丘陵尾根上に位置する調査区である。この尾根上には東に向かってテラスが連続してつながり、そのうち最も広いテラスで、任意に東西方向に2m×5mのトレンチを設定し調査を行った。表土と浅い堆積土を除去すると、平坦に加工した地山面とピットが検出された。これらのピットのうちいくつかは柱穴と考えられ、またピット内に礫が埋設された集石遺構が2基ある。検出した柱穴の配置からは掘立柱建物を復原することは不可能で



第27図 第VII調査区遺構配置図(1/80)



第28図 第VII調査区1・2号集石遺構平面図(1/20)

あるが、何度かの建替えがあったと推測される。2基の集石遺構は、1号が一辺45cm深さ20cmを測る隅丸方形のピット、2号は長径45cm深さ20cmを測る楕円形のピットでそれぞれピットの中に地山岩盤と考えられる礫が埋められている。

トレンチ内西側では、地山岩盤が溝状に穿たれた跡が認められた。東西と南北方向に岩盤の節理の方向を穿ったものが数本あり、これは当初鉦脈の露頭掘り跡

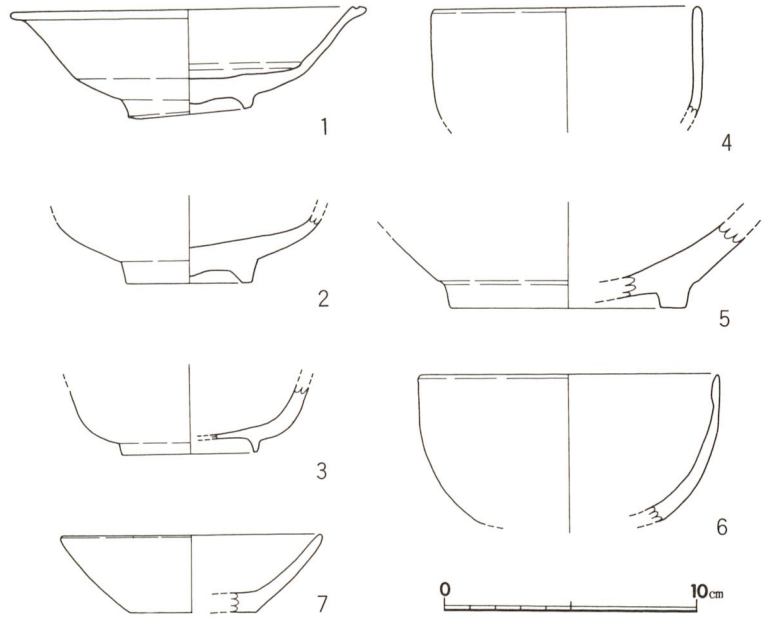
と考えられたが、石銀I区で観察されたマンガンが黒色の脈状になった状態とは異なることから鉦脈とは考えられない。

トレンチ内で検出したピット群と岩盤を加工した遺構の広がりを確認するために、南に2本のトレンチを設定し調査を行った。西トレンチでは南側で礎石と考えられる平坦な石とピットの一部を検出した。この遺構面は表面が締まり、炭化物と焼土が出土したことから作業面になると推測される。この遺構面の下層では岩盤がほぼ60cmに垂直に加工され、既に検出した岩盤面より一段低く平坦に加工していることが判明し、その上に礎石と考えられる石が数個検出され、さらに南で造成した整地面に繋がっている。この整地面では、平坦な石や礫を検出している。上層と同じように、遺構面になると考えられる。

東トレンチ内では、幅1.2m～1.6m、深さ20cmの溝状遺構とピットを検出している。これらの遺構面は西トレンチの下層の遺構面に繋がるものと推測される。

Ⅶ区の検出遺構は、掘立柱建物や礎石建物の一部になると考えられる。またその性格については調査区の5m南には、坑口があり周囲にズリの堆積が認められ、採鉦に関連する施設の可能性がある。また、わずかながらカラミも出土しており、製錬作業が行われたのかもしれない。

第29図はⅦ区の出土遺物である。1は李朝系陶器の皿で、内外面とも施釉され明灰緑色を呈す。内面に砂目当ての痕跡があり、高台畳付には目当ての砂が熔着している。口径13.8cm、器高4.3cmである。2～5は肥前系陶器で、2、3は碗の底部で2は灰色、3は暗黄緑色の釉がかかる。4は碗の口縁部から胴部にかけての破片で明灰緑色の釉がかかる。5は鉢の底部で、高台径9.2cmを測る大型のものである。6は肥前系磁器の碗で、口縁部から胴部の破片で、外面は淡緑色、内面は無色の釉薬を施釉する。7は土師質土器の皿で暗黄白色を呈し、体部が直線的に開くものである。口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。遺物の年代は、1は16世紀末から17世紀初頭、2～7は江戸期のものである。



第29図 第Ⅶ調査区出土遺物実測図(1/3)

IV 小 結

石銀地区の平成8・9年度調査成果について、その内容のまとめをおこないたい。

調査を実施した場所は、本谷からの道が北側へ行きついた場所で、調査地から北側には清水谷、遠く仁摩港と日本海が望める所である。復原される鉾山町の景観は、谷の中央に道、溝があり、その両側に建物が連なるといったもので、道路と溝がセットで谷の中に張り巡らされていたと思われる。Ⅱ区では道に沿って溝が掘られ、道と溝の北側延長上に窪地状遺構があり、そこで大きな溝が確認されている。この窪地状遺構は排水の際の調整池の役割を果たしていた可能性も捨て切れないが溝に後出するようにもとれ、不明な部分も多い。上層の建物は江戸時代のもので、17世紀前半から18世紀中ごろのものである。道との境界に石が並べられ、桁行の礎石列が確認されている。Ⅰ区の建物跡は、礎石建物跡と掘立柱建物跡があり、建物の時期により変遷があるものと思われる。

道の西側の礎石建物は精錬を行った吹屋と考えられ、炉跡を検出している。炉跡は3基が並んで築かれており、炉内には灰状のものが入っていた。また、右側の4号炉の上部に鉄鍋と思われる破片があり、その横には鉄製火箸が置かれていた。この炉の周辺では完形品の唐津焼の皿が多く出土し、その表面に炭状の付着物があることから、精錬の作業に使われた可能性がある。

Ⅱ区の上層建物跡は道の東側で2軒が並んで位置しており、2軒とも間口、奥行きが判る良好な資料である。2号建物跡は、坑道の前に位置し奥の山側にズリが堆積しており、中央石組に溝が取り付いており選鉾の施設と思われるもので、ここで鉾石の選別・選鉾が行われたものと思われる。1号建物跡は、道寄りに要石、奥側にゆりかすと選鉾施設、炉跡が配置され、吹屋の内部施設の配置の概略が確認された。上層の建物の配置は、谷の中央に道がありそこに面して建物があり、現在の谷状の地形の殆どの平坦地には当時の建物が1、2号建物と同程度の規模で建てられていたと思われる、町を復原する際の有効な手がかりとなった。

下層建物跡は戦国時代末になると考えられ、上層の建物と同じ方向性であることから道とそれに面して建てられていると考えられる。戦国時代に仙の山で採鉾と製錬を始め、建物を建てる段階から道、溝、建物の概略の配置が考えられていたものと思われる。下層建物は、礎石の上に柱材が載っており、土壁と木舞の材も残っていた。また、建築材とともに、木製の下駄、漆塗椀といった生活用品も出土しており、生活の様子が極めて良好に残されていた。建物が災害など突発的な原因により倒壊したことにより残ったものと思われる。堆積した土層の観察によると、下層の建物から上層の建物の間に何層もの土間面があることから、短期間で頻繁に建替えが行われたものと思われる。

鉄鍋は現在確認している遺構面の最下層から出土しており、これは灰吹法に使用した鍋であるとともに、灰吹法の遺構が確認された初めての発見となった。これまでの調査でも鉄鍋と思われる破片が出土しており、広く行われていた可能性がある。また、鉄鍋だけでなく、石鉢や地面に掘られた炉もあることから、それぞれが精錬工程のどの段階に使用されたものか、時代により変化するものかといった検討が必要になるとと思われる。

Ⅶ区の調査では、Ⅰ・Ⅱ区の谷部だけでなく、尾根上の平坦部でも建物があつたことが確認された。この結果、石銀地区の広い範囲で建物が建ち並んでいたものと思われる。

今回の調査で鉄鍋を使用した灰吹法の遺構が検出されたことは、これまで国内では検出例がない

遺構であることや、石見銀山の産銀量の爆発的な増産の契機となった技術と言われるだけに、画期的な資料となった。鉄鍋の内外の土や鉄鍋そのものについては、今後科学調査を行う予定であるので、ここでは出土直後に行ったX線撮影・CTスキャナー撮影、および蛍光X線分析の調査概要を記しておきたい。

まず、X線撮影・CTスキャナー撮影の結果であるが、鉄鍋は片口が付き鍋の底には足が付く形態で、片口の両側と反対側に吊り手を付ける穴の開いた突起がある。吊り手については撮影の結果確認できないので、既に失われているかもしれない。鉄鍋の内部には棒状のものと、小さな塊が多く見られる。また底に付着した土の中にはリング状のものがある。

次に蛍光X線分析の結果である。灰の内部に堆積しているきめの細かい黄色土は、Ca（カルシウム）が非常に多いことから灰と考えられる。また内部・外部の土ともPb（鉛）、Mn（マンガン）が含まれていることが判明している。詳細については今後の本格的な分析調査に期待したいところである。



I 区 全 景 (南より)



I 区 調 査 風 景 (北より)



I 区礎石建物跡と道跡（西より）



I 区礎石建物跡（南より）



I 区 露頭掘りの跡 (南より)



坑道入口 (西より)



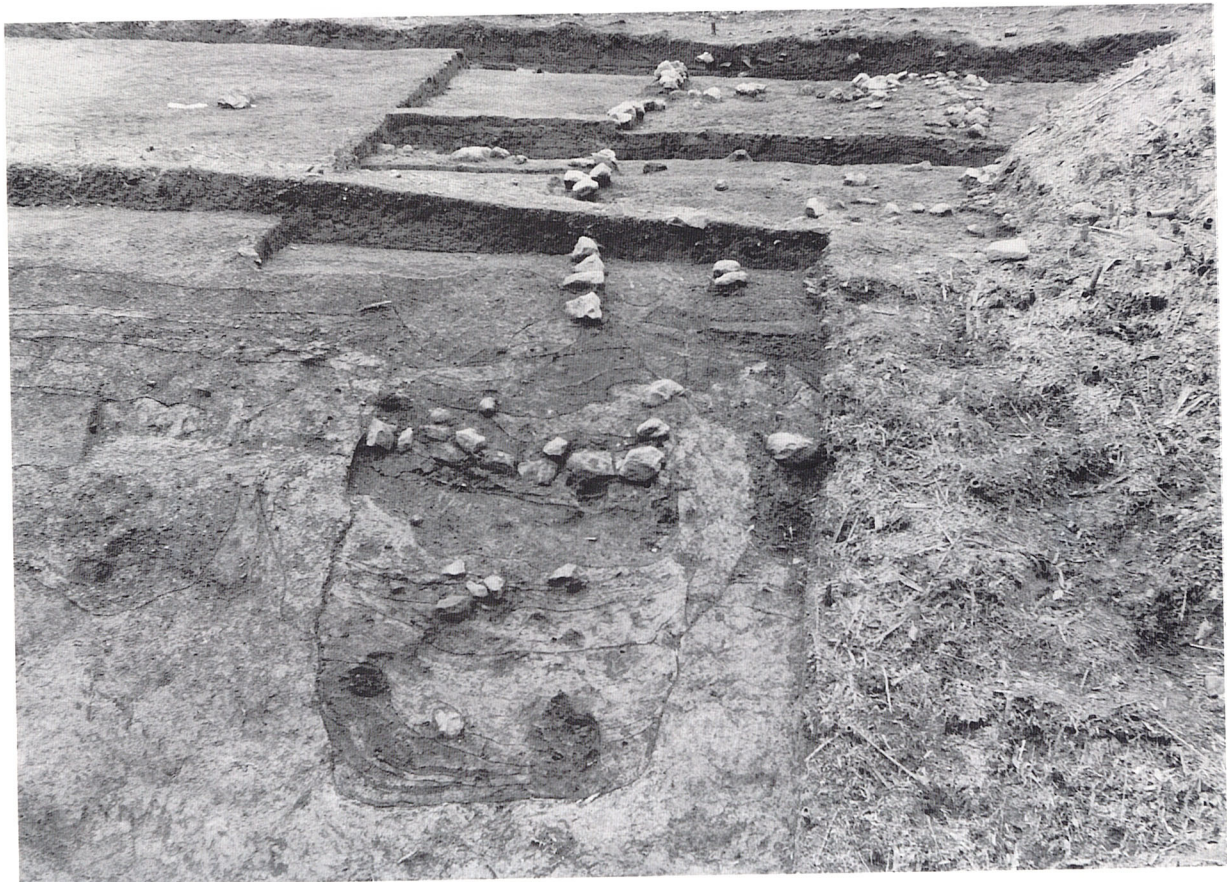
I 区 炉 検 出 状 況 (東より)



I 区 石 積 み 土 坑 (南より)



Ⅱ 区 くぼ地 (東より)



Ⅱ 区 くぼ地溝 (北より)



Ⅱ 区 1号建物（右）、2号建物検出状況（西より）



2 号 建 物（北より）



2号建物全景(西より)



2号建物東側、ずり堆積状況(北より)



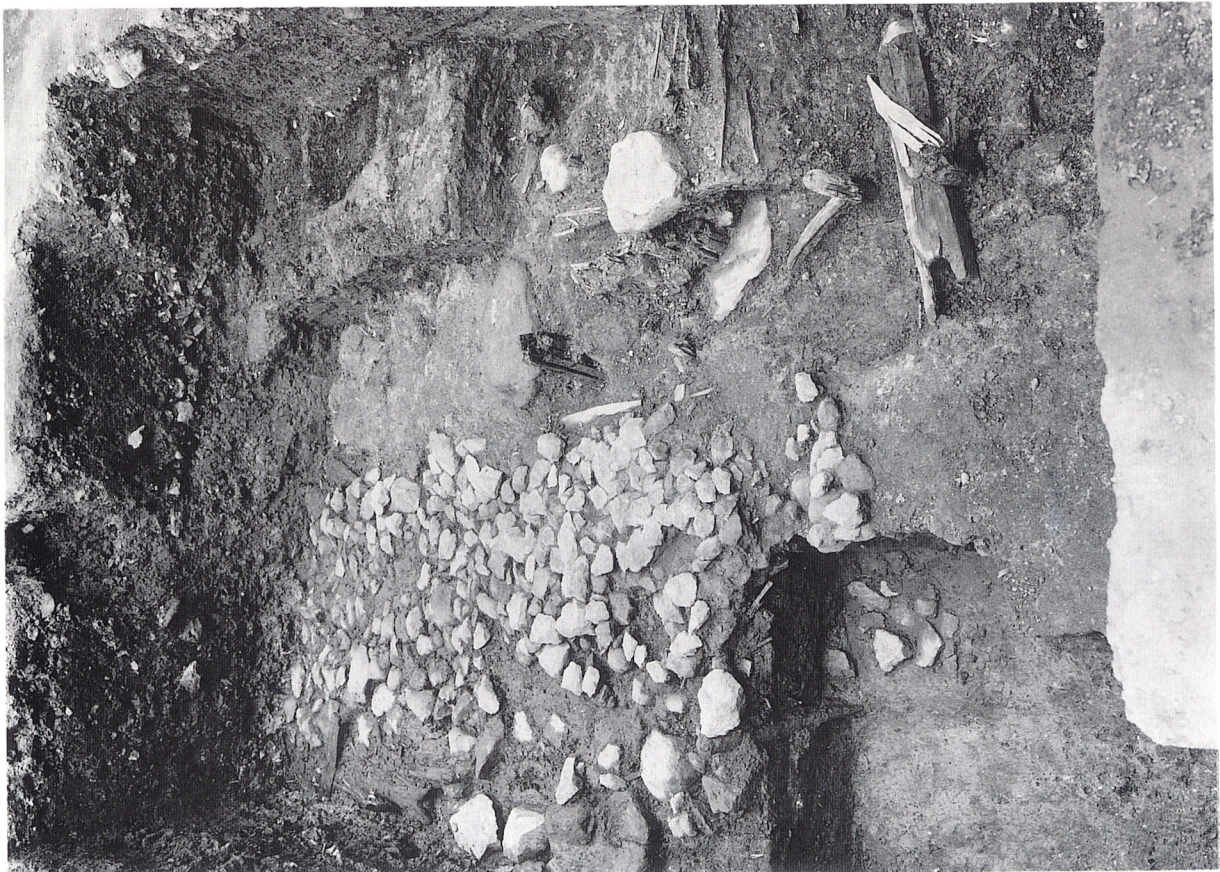
坑口前トレンチ土層堆積状況（南より）



鉄鍋検出状況（南より）



坑口前トレンチ下層建物跡検出状況（西より）



坑口前トレンチ下層建物跡検出状況（東より）



I 区 D-18区、2号、3号、4号炉検出状況（南より）



F-20区 石鉢検出状況（南より）



Ⅶ 区 全 景 (西より)



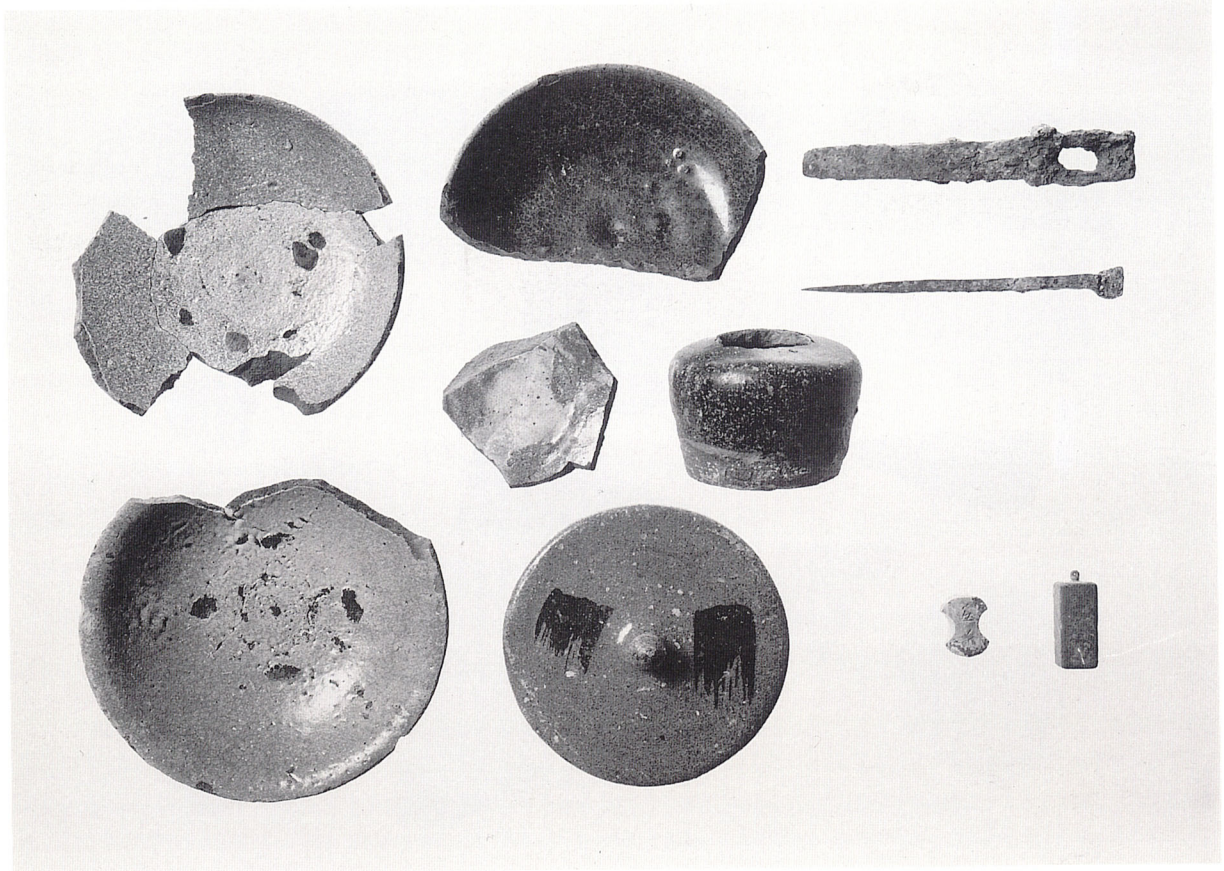
Ⅶ 区 遺構検出状況 (北より)



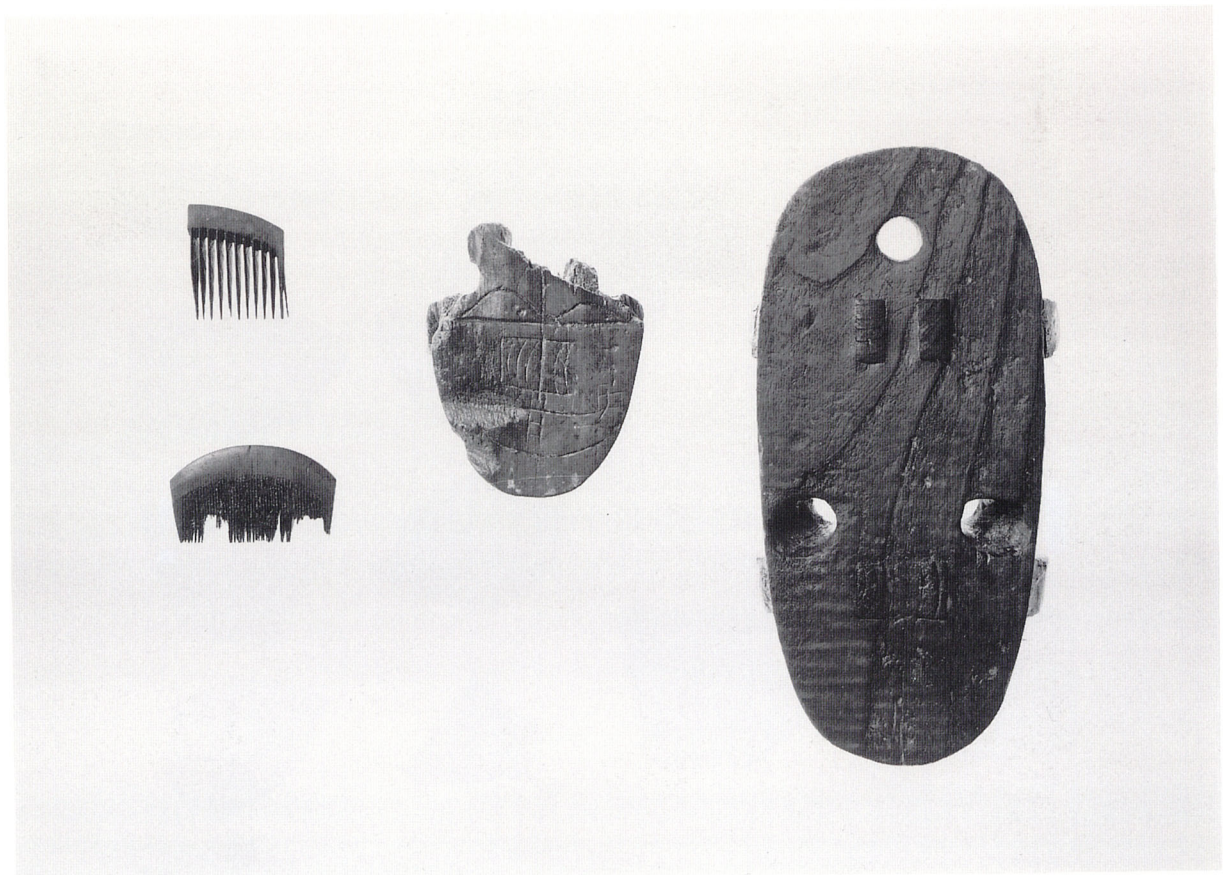
平成8年度 出土 遺物



平成9年度 I 区 出土 遺物



坑口前トレンチ出土遺物、平成8年度出土遺物、分銅



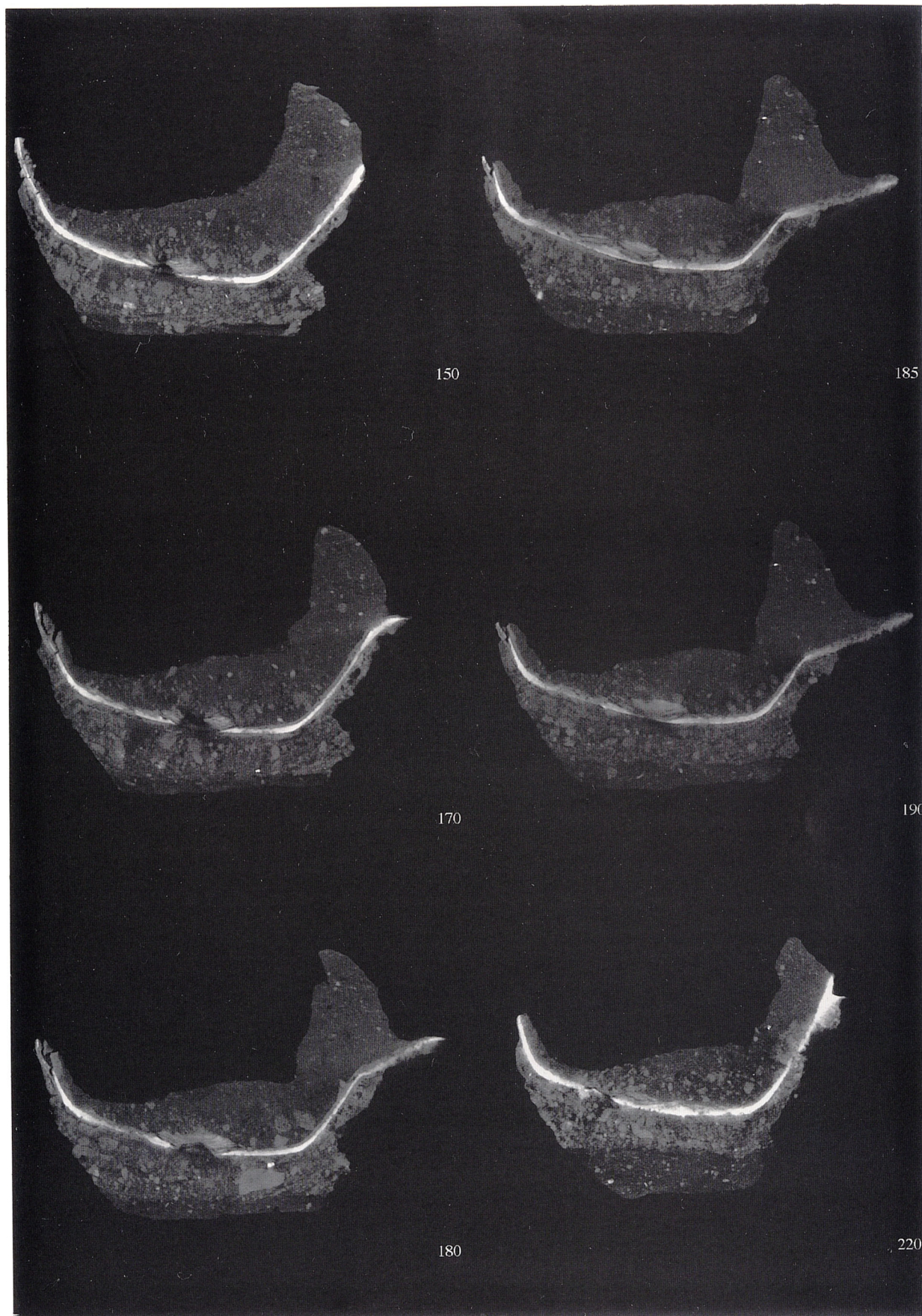
坑口前トレンチ出土遺物(木製品)



Ⅱ区 上層建物跡出土遺物



Ⅱ区 上層建物跡出土遺物 Ⅶ区出土遺物 (29-1~7)



鉄鍋の X 線 CT スキャナー 撮影写真

大田市埋蔵文化財調査報告 21

石見銀山遺跡発掘調査概要 9

1998年3月

島根県大田市教育委員会
(島根県大田市大田町大田口1111番地)

